

SUNTORY HALL
SUMMER
FESTIVAL

サントリーホール
サマーフェスティバル

2023 8/23 Wed → 8/28 Mon



SUNTORY HALL

SUNTORY HALL
SUMMER
FESTIVAL
2023

1986年秋に開館したサントリーホールのおー
プニング・シーズンである1987年夏から毎年開
催されている、この『サマーフェスティバル』では、
現在（いま）の作曲家、音楽家によって創造され
る音楽を紹介し続けています。

このフェスティバルのコンセプトである「現代音
楽」の醍醐味は、誰もが等しく「新しさ」と「歴史」
を共有することができることです。ここで演奏さ
れる作品のひとつひとつが、いま私達が生きる
社会を切り取り映し出す鏡であり、また同時に、
未来の音楽史の1シーンになるのです。

コンサートホールという創造の現場で同じ空間、
時間を共有する全ての方が、今だけの「新しい」
そして「面白い」を体験していただければ幸い
です。

※1987～2017年まで『サントリー音楽財団（現：サン
トリー芸術財団）サマーフェスティバル』として開催。
2018年から『サントリーホール サマーフェスティバ
ル』の名称となりました。

SUNTORY HALL
SUMMER
FESTIVAL
2023

本日は、サントリーホールの夏の恒例『サントリーホール
サマーフェスティバル』にご来場いただき、厚く御礼申し上
げます。

2023年も多様なプログラムが揃います。作曲家、三輪
眞弘氏が手掛けるザ・プロデューサー・シリーズでは、「ガ
ムラン」をキーワードに様々なアーティストが集い、音楽の
先にあるコミュニティとアシミレーションの可能性を問う、と
いうユニークな思考型プログラムです。

テーマ作曲家として取り上げるのは、オーストリアの女性
作曲家、オルガ・ノイヴィルト。新次元を切り開く強いエネ
ルギーを持ったノイヴィルトを日本で本格的に紹介する初め
での機会です。

第33回芥川也寸志サントリー作曲賞選考演奏会では、
2年前の受賞者桑原ゆうさんの委嘱作品をはじめ、すでに
グローバルな活躍をしている作曲家達の作品が賞の候補
作品として演奏されます。

今夏のサマーフェスティバルをどうぞお楽しみください。

2023年8月

公益財団法人 サントリー芸術財団 代表理事
堤 剛

サントリーホール サマーフェスティバル2023

ザ・プロデューサー・シリーズ

三輪眞弘がひらく ありえるかもしれない、ガムラン

- プロジェクト型コンサート En-gawa
8月25日(金)13:00~20:00 ブルーローズ
8月26日(土)13:00~20:00 ブルーローズ
8月27日(日)10:00~17:00 ブルーローズ
- Music in the Universe
8月27日(日)17:00 大ホール

テーマ作曲家

オルガ・ノイヴィルト

サントリーホール国際作曲委嘱シリーズNo. 45 (監修: 細川俊夫)

- 作曲ワークショップ × トークセッション
8月23日(水)19:00 ブルーローズ
- オーケストラ・ポートレート
(委嘱新作初演演奏会)
8月24日(木)19:00 大ホール
- 室内楽ポートレート
(室内楽作品集)
8月28日(月)19:00 ブルーローズ

第33回

芥川也寸志サントリー作曲賞 選考演奏会

8月26日(土)15:00 大ホール

会場 サントリーホール
主催 サントリーホール(公益財団法人サントリー芸術財団)
協賛 サントリーホールディングス株式会社
制作協力 東京コンサーツ



特集ページはこちら

SUNTORY HALL SUMMER FESTIVAL 2023

The Producer Series

MASAHIRO MIWA

- En-gawa
Friday, August 25, 13:00-20:00 / Blue Rose
Saturday, August 26, 13:00-20:00 / Blue Rose
Sunday, August 27, 10:00-17:00 / Blue Rose
- Music in the Universe
Sunday, August 27 at 17:00 / Main Hall

Theme Composer

OLGA NEUWIRTH

Suntory Hall International Program for Music Composition No. 45 (Artistic Director: Toshio Hosokawa)

- Music Composition Workshop × Talk Session
Wednesday, August 23 at 19:00 / Blue Rose
- Orchestra Portrait
(Commissioned Work Program)
Thursday, August 24 at 19:00 / Main Hall
- Chamber Music Portrait
Monday, August 28 at 19:00 / Blue Rose

The 33rd Competition of

Yasushi Akutagawa Suntory Award for Music Composition

Saturday, August 26 at 15:00 / Main Hall

All concerts held at Suntory Hall

Presented by Suntory Hall (Suntory Foundation for the Arts)
Supported by Suntory Holdings Limited
Coordinated by Tokyo Concerts, Inc.



For More Details

三輪眞弘がひらく
ありえるかもしれ
ないガムラン
En-gawa
三輪眞弘

三輪眞弘
Music in the
Universe

テーマ作曲家
オルガ・ノイ
ヴィルト

ノイヴィルト
ワークショップ×
トークセッション

ノイヴィルト
オーケストラ
ポートレート

ノイヴィルト
室内楽
ポートレート

芥川也寸志
サントリー作曲賞

ザ・プロデューサー・シリーズ

三輪真弘がひらく
ありえるかもしれない、ガムラン

The Producer Series MASAHIRO MIWA

ザ・プロデューサー・シリーズによせて 10
For the Producer Series

8/25-27 プロジェクト型コンサート En-gawa 18

8/27 Music in the Universe 22

テーマ作曲家

オルガ・ノイヴィルト

サントリーホール国際作曲委嘱シリーズNo.45(監修:細川俊夫)

Theme Composer Olga Neuwirth

Suntory Hall International Program for Music Composition No. 45 (Artistic Director: Toshio Hosokawa)

オルガ・ノイヴィルトについて 細川俊夫 44
Introduction for Theme Composer Olga Neuwirth
Toshio Hosokawa, Artistic Director of Suntory Hall International Program for Music Composition

8/23 作曲ワークショップ×トークセッション 51
Music Composition Workshop × Talk Session

8/24 オーケストラ・ポートレート(委嘱新作初演奏会) 54
Orchestra Portrait (Commissioned Work Program)

8/28 室内楽ポートレート(室内楽作品集) 70
Chamber Music Portrait

第33回 芥川也寸志サントリー作曲賞選考演奏会

The 33rd Competition of Yasushi Akutagawa Suntory Award for Music Composition

8/26 芥川也寸志サントリー作曲賞選考演奏会 85
Competition of Yasushi Akutagawa Suntory Award for Music Composition

演奏曲リスト 95
List of the Pieces

サントリー芸術財団の活動 98
Activity of Suntory Foundation for the Arts



【特別企画】



スペシャル・コラボレーション

クイズ王 伊沢拓司 率いる
東大発の知識集団 **QuizKnock** とのコラボが
今年も実現!

■来場者限定特典!

QuizKnock 作問「現代音楽クイズ」

サマーフェスティバルにご来場いただいた方だけに、
QuizKnock 作問のオリジナル現代音楽クイズに
チャレンジいただけます!

以下の二次元コードからサントリーホール公式LINEアカウント
を友だち追加いただくと、LINE上にクイズが表示されます。

クイズに加えて、アンケートにもご回答いた
だいた方にはもちろん全員、QuizKnock×
サマーフェスティバル限定のスマートフォン用
壁紙をプレゼントします。



■三輪真弘さん×QuizKnock
スペシャルトーク動画

『難解? 意味不明? 現代音楽の楽しみ方
【好きになっちゃおう放課後】』



デジタルサントリーホールの
「WATCH」ボタンより
ご視聴いただけます。

※各曲のプログラム・ノートには、
原則として作曲家がスコアに記し
た「楽器編成」を、略号を含めた
表記で掲載しております。

楽器略号表

Acc	アコースティック
A-Fl	アルト・フルート
Bar	バリトン
Bs	バス
Bs-Cl	バス・クラリネット
Bs-Fl	バス・フルート
Bs-Trb	バス・トロンボーン
Cast	カスターネット
CB-Cl	コントラバス・クラリネット
CB-Tub	コントラバス・チューバ
Cel	チェレスタ
C-Fg	コントラファゴット
Cl	クラリネット
Cym	シンバル
DB	コントラバス
E-Hrn	イングリッシュ・ホルン (コーラングレ)
Es-Cl	Es管クラリネット
Fg	ファゴット
Fl	フルート
Glock	グロッケンシュピール
Guit	ギター
Hrp	ハープ
Hrn	ホルン
Mar	マリンバ
M-S	メゾ・ソプラノ
Ob	オーボエ
Perc	打楽器
Pf	ピアノ
Picc	ピッコロ
Picc-Trp	ピッコロ・トランペット
S	ソプラノ
Sax	サクソフォーン
T	テノール/テナー
Tamb	タンバリン
Timp	ティンパニ
T-Trb	テナー・トロンボーン
Trb	トロンボーン
Tri	トライアングル
Trp	トランペット
Tub	チューバ
Va	ヴァイオリン
Vc	チェロ
Vib	ヴィブラフォン
Vn	ヴァイオリン
Xyl	シロフォン



ザ・プロデューサー・シリーズ
三輪真弘がひらく
ありえるかもしれない、ガムラン
The Producer Series
MASAHIRO MIWA

プロジェクト型コンサート En-gawa

8月25日(金)～27日(日) ブルーローズ
Friday-Sunday, August 25-27 / Blue Rose

Music in the Universe

8月27日(日) 17:00 大ホール
Sunday, August 27 at 17:00 / Main Hall



後援：インドネシア共和国大使館
Under the Auspices of Embassy of the Republic of Indonesia



助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】
Supported by Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

「ありえるかもしれない、ガムラン」

～ ザ・プロデューサー・シリーズによせて

●三輪眞弘

今回の企画は、インドネシアの伝統芸能であるガムランという文脈の中でその素晴らしさや可能性を紹介するといった視点ではなく、むしろ「機械システムと共に生存するようになった人類」としての「音楽」の未来、ひいては地球環境や人間世界の未来について、ガムランの実践を通して現代に生きる人々と共に（ゆるやかに～）考えてみたいというものである。

いよいよ実用段階に達したメタバース（仮想現実）や、AI（人工知能）などの最新技術のトピックと並行して進行する、地球温暖化、自然破壊（それに伴うウイルス感染拡大?）、侵略戦争、民主主義の危機などに象徴される、20世紀の国際社会が築き上げた人間世界の崩壊を日々目の当たりにする今、音楽はそれらに関わりなく、これまで通りの技芸を探求し続けていられるのか、音楽は現在の危機は無関係なもの、いや、むしろ現実世界を忘れるためのものだったのか、という個人的な疑問に対する返答として僕は今回の企画を提案した。

今回の企画／公演で中心的な役割を果たすガムラン・アンサンブル「マルガサリ」が2007年に大阪のザ・フェニックスホールで開催した「ガムラン・コモンズ」というコンサートのフライヤーに、マルガサリの創設者でもある中川真氏は「これはコンサートではありません、未来の音楽や社会を考えるための集会（フォーラム）です」と書いたが、その延長線上にこの企画は位置づけられるだろう。

そうするにあたっては、いくつかの前提があった。サマーフェスティバルにおける作品および演奏のクオリティ、聴衆の音楽体験の質、サントリーホールの社会的な機能や文脈と具体的な空間特性。当然のことでもあるそれらを前提としつつ、それぞれの条件を浸潤したり、緩めたりすることによって、現代社会における「演奏会」というものの拡張をはかるうとしたのが今回のガムランのコスモロジーによって提示される「ありえるかもしれない、ガムラン」に他ならない。

ガムランの伝統的な特性として、音楽が他ジャンルに有機的に関係づけられているという点がある。上演形態をとってみても歌唱はもとより、舞踊、演劇、影絵芝居などと融合され、それらはまたしばしば葬式、結婚式、記念日などの宗教的、社会的な意味を担うもので、コンサート・ホールで単独の「作品」として上演されるということは基本的に稀である。この異なるレイヤーとの重層性はガムランが現代においても生き生きと伝えている人類にとっての「音楽」の根源的な特質であり、また魅力でもある。

そのような音楽のあり方を今回の企画で再確認できないかと考えた。それは従来のサントリーホール サマーフェスティバルの形式とはかなり異なるかもしれないが、逆にサントリーホールにおける時空間の可能性を再発見することにもなるのではないかと夢見たのだ。その手法として、従来のコンサート形式だけではなく、現代社会における「私たちのための芸術」を求め続けるアート・コレクティブ「KITA」による「プロジェクト型」という「公演」の形式を考えた。それは、単にその場で行われるガムランを巡る多様なイベントの集まりとしてではなく、ブルーローズ・ホールに出現した時空間全体を「逆メタバース(!?) 作品」として捉えてみたものである。

作曲家：三輪眞弘 Masahiro Miwa, Composer

1958年東京生まれ。78年に渡独、国立ベルリン芸術大学で作曲を尹伊桑に、85年より国立ロベルト・シューマン音楽大学でギュンター・ベッカーに師事する。

80年代後半からコンピュータを用いた作曲の可能性を探求し、特にアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる手法で数多くの作品を発表。また、様々な分野のアーティストとのコラボレーションに加え、CD制作、著作活動など、その活動は多岐にわたる。

85年ハムバッハー国際作曲コンクール佳作、89年第10回入野賞第1位、91年「今日の音楽・作曲賞」第2位、92年第14回ルイジ・ルッソ国際音楽コンクール第1位、95年村松賞新人賞、2004年オーケストラのための『村松ギヤ・エンジンによるボレロ』で芥川作曲賞、07年音楽についての独自の的方法論「逆シミュレーション音楽」がプリ・アルスエレクトロニカ、デジタル・ミュージック部門でグランプリ（ゴールド・ニカ）を受賞。さらに08年美術家マーティン・リッチズとの共作『Thinking Machine』が同賞ハイブリッド・アート部門で佳作入選。09年フォルマント兄弟として『フレディの墓／インターナショナル』が再び同賞デジタル・ミュージック部門で佳作入選。また、映像作家の前田真二郎との共同作品、モノローグ・オペラ『新しい時代』（00）の再演に対して、17年に愛知県芸術劇場とザ・フェニックスホールが第17回佐治敬三賞を受賞。21年には、自身のこれまでの業績と「ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 一清められた夜」（主催：サラマンカホール）が評価され、第52回サントリー音楽賞と第20回佐治敬三賞の同時受賞に輝いた。作品集CDに『赤ずきんちゃん伴奏器』（1995）、『東の唄』（98）、『新しい時代信徒歌曲集』（2001）、『言葉の影、またはアレルヤ』（01）、『村松ギヤ（春の祭典）』（12）など。著書に『コンピュータ・エイジの音楽理論』（1995）のほか『三輪眞弘音楽藝術 全思考1998-2010』により2010年度第61回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。1996年より岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー [IAMAS]、2001年より情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 教授。旧「方法主義」同人。「フォルマント兄弟」の兄。



「蜃気楼、ではない。」

プロジェクト・ディレクション

●アート・コレクティブ「KITA」

熱帯の地域にあるひらかれた家を、
周辺の景色や営みを含めて、
遠く離れたどこかへと再現する。

飾りと模様、柱と屋根。
家とまわりとその境界、縁側。
音楽が響く、屋台がやってくる、
踊りがはじまる、鳥が鳴く。
自由に。人があるべきふるまいを取り戻す。

これは、サントリーホールがみた真夏の蜃気楼、ではない。
ありえなければならぬ、音楽がつくるわたしたちの「家」だ。

私たちKITAのひとつの拠点となっているジョグジャカルタ・セウォン地区にある伝統的なジャワ建築「リマサン」。本来のこの建築は住宅であり木製の壁に覆われていますが、私たちが使っている建物は壁がほぼなく、柱と屋根のみで周囲にひらかれています。こうした壁のないスペースは集会場（ブンドポ）とも言われ、人びとが集まり何かをする場所として、街のいたるところにあります。家屋であっても中に一歩入ると客間がひろがり、そうした客間もまた同じように誰かを招き、人が集まる文化の受け皿となっている空間なのです。こうした伝統家屋は、結婚式などの祝祭や、ガムランやジャワ舞踊、影絵芝居の舞台としても使われます。何もなくても誰かがいておしゃべりをしていたり、近くの子どもたちが遊んでいたたりすることもあります。音楽を鳴らしたり、凧を作ったり、昼寝したり、鶏がやってきました。そこはまるで、至極自由な公園です。

こうしたジャワの伝統家屋がもつ「ひらかれた家」としての性質が、KITAの試みる「わたしたち」のための芸術と親和性があると感じ、家屋と敷地一帯を活動拠点として使い始めました。今回、サントリーホールでガムラン公演の場を制作するにあたり、公演の舞台をつくるというよりは、ガムランの音や文化も内包した街の一部、つまり広場のような家とその営みを再現するのはどうかと考えました。ジャワ

の日常において特別な公演としてガムランを鑑賞することもあります。多くはごく自然に聞こえてくる街の音色です。ならば、その街の様子ごとつくり出すことはできないだろうか、と。

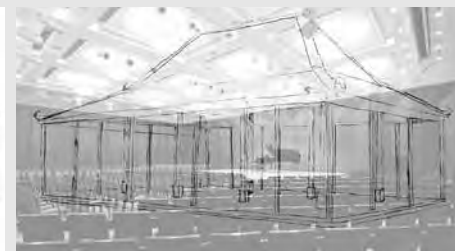
ジャワ建築の人びとが集う特徴と、日本家屋の縁側が内と外をつなぐ性質をもつところに共通性を感じ、タイトルは「En-gawa」としました。Enは縁（えん・ふち）、gawaは側（がわ・そば）。また、ジャワ語でGawaはゴウォと発音し、「持ってくる」という意味をもっています。このプロジェクトで、はなれた地域を創造的に持ち寄り、見慣れない場所同士をつなぐ想像の「縁側」を生むことで、より自由な「わたしたち」のありかたを見つけてみたいと思っています。

アート・コレクティブ：KITA

KITA, Art Collective

2022年結成。さまざまな分野と国籍のメンバーからなる拡張するアート・コレクティブ。

「Kita」とは、インドネシア語で「わたしたち」を意味する。この言葉を手がかりに、人びとを招き入れていく彼らの活動は「だれがKITAか」を曖昧にし、芸術の主体について問いなおす。日本とインドネシアを主な拠点に、国家や言語、ジャンルの境界線を越えて交わされるコミュニケーションから、祝祭的なプロジェクトや作品だけでなく、生活空間で用いる実用品も生み出している。KITAは、こうした活動を通して、中心メンバーを含めた関わる人びとの生を有機的に編み直し、現代社会の環境下における、新しい「わたしたち」のありかを探す。23年7月現在のコアメンバーは、アディティヤ・ブトラ・ヌルファイジ、アナスタシア・ユアニタ、北澤潤、シティ・サラ・ライハナ、津田翔平、能作淳平、ミヤタユキ、ムニフ・ラフィ・ズディ（五十音順）。



「En-gawa」のためのドローイング(2022年)

「動き続けるコンサート」

ミュージック・ディレクション

●ガムラングループ「マルガサリ」大井卓也

En-gawaの企画初期のメモを見返すと「コンサートのあり方を疑う」、「サントリーホールに裂け目をつくる」といった過激な文字が目につく。これは三輪さんの「ありえるかもしれない、ガムラン」というテーマに呼応してメンバーから出てきた言葉だ。その意味を要約するならば、いわゆるクラシカルなコンサートという制度そのものを問い直し、また、サントリーホールという音楽の殿堂(あるいは城塞?)に、ガムランという回路を通じて穴を穿ち、誰もが出入りできるような広場的空間を作り出したい、ということになるだろう。そうして立ち上がったEn-gawaプロジェクトはKITAによる場の設計と、マルガサリによる音楽的なイベントの設計、二本の柱で進行していくことになる。

今回、マルガサリがEn-gawaの音楽的コンテンツを考えるにあたっては、きちんとしたフォーム(形式)を持ったコンサートを構築するのではなく、En-gawaという場所に根差しつつ、そこから自然発生的に音楽が生まれてくるような環境を作り出すことに主眼を置いた。そうして考案されたのが、ゆるやかなタイムラインのなかで様々なゲストが入れ代わり立ち代わり現れ、時には重なり合いながら、常に表現が交差する時間が流れ続ける枠組みである。

ゲストにはガムラン奏者だけでなく、それ以外のミュージシャン、ダンサー、影絵師…と多様な背景を持つ人たちが含まれる。一見バラバラにも見えるが、インドネシアの伝統文化やガムランにリスペクトを持ちつつ新たな芸術を開拓している方々であり、かつ、En-gawaという空間で、その場にいる人たちを巻き込みながら臨機応変に表現を編み出していける実力者が揃っている。そんなみなさんが出入りするこの3日間には未知の出会いや化学変化が起こり、予想もしていないような楽しいハプニングが生まれるに違いないとワクワクしている。

En-gawaの企画を考えていく中で脳裏に浮かんでいたのはフランスの庭師ジル・クレマン(1943~)の「動いている庭」のイメージだった。植物を植えるだけではなく、その後の植物のうつろいや、動物や昆虫、人間の関わりなども含めた大きなダイナミズムとして庭をとらえ、進化していく生態系のように考える哲学だ。En-gawaにおける“コンサート”も、単に音楽が鳴っている時間のみを指すのではなく、訪れる人々やそこで起こる事柄すべてを含んだ体験がコンサートとなる。そ

うして、動き続けるコンサートとして変化し、生まれ続けていくのだ。

サマーフェスティバルのチラシを見るとEn-gawaの前には「プロジェクト型コンサート」という冠が付いている。“プロジェクト”の原義は「pro(前に)+ject(投げる)=未来に向かって投げかけること」だという。ここまでお話ししたように、En-gawaはまだまだ何が起こるか分からない、たくさんの余白のある空間でもある。ぜひ、みなさんもプロジェクトの一員として、来て、聞いて、見て、楽しんで、未来に向けて一緒にコンサートを作っていっていただければ幸いです。



ガムラン：マルガサリ Marga Sari, Gamelan Jawa

1998年に発足。ジャワのガムラン音楽をルーツに、伝統的な古典音楽の上演のみならず、世界各地の作曲家への新作委嘱やパフォーマンス作品の創作を積極的に行い、国内外で高い評価と注目を得ている。特に、2008年の日本・インドネシア修好50周年を記念したインドネシア公演は、国際交流基金、アサヒビール芸術文化財団の助成を得て挙行され、現地に大きなインパクトを与えた。

作曲家やアーティストとのコラボレーションを通じ「現代音楽としてのガムラン」を追求しており、野村誠との共同制作による歌舞劇『桃太郎』をはじめ、三輪真弘によって『愛の讃歌』ほか多数の作品がマルガサリのために作曲され、20年には初演作品『鶏たちのための五芒星』を含む「ぎふ未来音楽展2020 三輪真弘祭 一清められた夜一」(第20回佐治敬三賞受賞公演)にも出演。

また、現代において音楽文化が果たす役割について考え、実践的に提案する活動にも取り組み、障害のある人との作品づくりや、甚大な災害(大地震など)を受けた人々、地域へのサポートなども行っている。04年より障害のある人たちとともに舞台作品『さあトーマス』を制作し、大阪、東京、滋賀、奈良、徳島などで公演を重ねた。06年の中部ジャワ大地震に際してはサポート組織を立ち上げた。

大阪府豊能町をベースとしつつ、近年は京都府木津川市に第2拠点を設け、その活動の範囲を広げている。出演メンバー：恵美須屋直樹、大井卓也、黒川岳、谷口かんな、中川真、西真奈美、西村彰洋、森山みどり、柏木春菜、佐々木大空、吉田一真、鰐淵陽介(※は客演)

ガムラン 楽器紹介

ジャワ古典音楽における機能を紹介する。名称の綴り、発音は複数あり、ここで用いるのは一例である。また一部、バリの楽器も含まれている。

ガムランとは

音列をなす金属打楽器で演奏する音楽文化を、ホセ・マセダはゴングチャイム文化と呼び、東南アジアに大きく広がっていると指摘した。その淵源の一つがベトナムのドンソン文化(紀元前5世紀頃)から伝わる青銅製の銅鼓といわれており、その表面には当時のコスモロジーを表す繊細な線刻が見て取れる。楽器であると同時に、霊的存在と繋がる祭式の装置でもあったと推測される。深く響く余韻は確かに霊的である。さて、今回登場するジャワのガムランはその系譜を受け継ぎ、代々の王宮の儀礼で鳴り響いてきたが、20世紀に入り、とりわけインドネシア共和国の独立後は市井や海外に一気に広がって、近代的な都市文化と交差しながら、新しい担い手と意味を求めている。現在、日本では約100団体がアクティブに活動している。



Saron Peking, Barung, Demung

(サロン・プキン、バルン、ドゥムン)
左からプキン、バルン、ドゥムンで、バルンガンという核旋律を演奏する。ドゥムンのオクターブ上がバルン、さらにオクターブ上がプキンという音高になる。



Silentem (スレントム)

バルンガンを演奏するが、サロン・ドゥムンの1オクターブ下で、長い余韻とともに全体の旋律を下支える。

Gender Panerus, Barung

(グンデル・パナルス、バルン)
約2オクターブ半の音域をもつグンデル・バルン、その1オクターブ上の音高をもつグンデル・パナルスは柔らかい音色と細かい奏法によって、シンデン(女性の歌)、ルバブとともに「隠れた旋律」を紡ぎ出す。



Rebab (ルバブ)

2弦の擦弦楽器であり、楽曲のはじめに音律を示したのち、シンデンと絡みながら、曲の個性をつくり、音楽の行方をリードする。

Bonang Barung, Panerus

(ボナン・バルン、パナルス)
ボナン・バルンはパナルスとともに、バルンガンの間を埋めて、ガムランにふくよかな活気を与える。プマンブンという更に巨大なボナンもある。



Ketuk, Kempyang

(クトゥ、クンピヤン)
同じパターンを繰り返しながら速度やリズムの調整をする楽器。演奏に安定感をもたらす。



Kenong, Kempul

(クノン、クンプル)
クノンはクンプルと対をなして、バルンガンをとるところで強調する。



Gambang (ガンバン)

カリマンタン地方のウリン(鉄の木)を材料とする木質の楽器で、グンデルと似て、細かい旋律を奏でる。



Siter (シトゥル)

鉄製の12本の弦が張られ、指で弾いて音を出すツィター系の楽器で、収納ボックスを共鳴箱として使う。ガムランに華やかな音色を加える。



Suling (スリン)

竹製の笛で、歌やルバブを聴きながら、比較的自由に吹く。

Kendang Bali (クندگان・バリ)

バリ島の楽器で、合奏をテンポやリズムの側面からリードする両面太鼓。通常はラン(男)とワドン(女)の組み合わせで2つ用いられる。



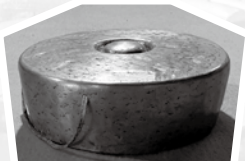
Ceng Ceng (チェンチェン)

バリ島の楽器で、クندگانと連動して歯切れの良いリズムを浮かせさせる。ジャワ島のケチェルに対応。



Kajar (カジャル)

バリ島の楽器で、規則的な歩みを作り出す。ジャワ島のクトゥに対応。



Kecer (ケチェル)

小さなシンバルが2枚、木製の台に据え付けられており、それを両手に持った別の2枚のシンバルで打って音を出す。影絵芝居などに用いられ、歯切れの良い音でリズムを制御する役割を担う。



Ciblon (チブロン)

中型の太鼓で主に舞踊曲において用いられる。舞踊の振り付けとチブロンのリズムパターンが連動している。

Kendang Ageng, Ketipung

(クندگان・アゲン、クティプン)
大小の太鼓で、音楽全体のリズムの制御を行う。1組でクندگان・ドゥアとも呼ばれる。



Gentorak (グントラク)

バリ島の舞踊劇グループにおいて用いられる楽器で、周期的なタイミングで鳴らされる。

三輪眞弘がひらく
ありえるかもしれない、ガムラン

文・写真提供：中川 真

ザ・プロデューサー・シリーズ

三輪眞弘がひらく

ありえるかもしれない、ガムラン

The Producer Series MASAHIRO MIWA

8.25(金)~27(日) ブルーローズ

Friday-Sunday, August 25-27 / Blue Rose

プロジェクト型コンサート En-gawa

サントリーホールにガムランとアートプロジェクトの時間が一体となった、ありえるかもしれないコンサートの場「En-gawa」があらわれます。

En-gawaでは「ひらかれた家」を中心にホールの中が広場となり、自由にそこを散策することができます。音楽が鳴ると行商や屋台と共に街の顔ぶれが集まるガムランの故郷、中部ジャワの一角に居るような雰囲気は、昔の日本の縁側に流れる時間を想起させるかもしれません。広場のあちこちにある屋台や露店を楽しみながら、演奏が始まる時間を待ちましょう。

この三日間に幕間はありませんが、常にひらかれている時間に身を委ねてみてください。

●プロジェクト・ディレクション：KITA

(アナスタシア・ユアニタ、アディティヤ・プトラ・ヌルファイジ、北澤潤、シティ・サラ・ライハナ、津田翔平、能作淳平、ミヤタユキ、ムニフ・ラフィ・ズディ)

※kita=インドネシア語で「私たち」の意味

KITA, Project Direction

(Anastasia Yuanita, Aditya Putra Nurfaizi, Jun Kitazawa, Siti Sarah Rayhana, Shohei Tsuda, Junpei Nousaku, Yuki Miyata and Munif Rafi Zuhdi)

●ミュージック・ディレクション：ジャワ・ガムラン「マルガサリ」

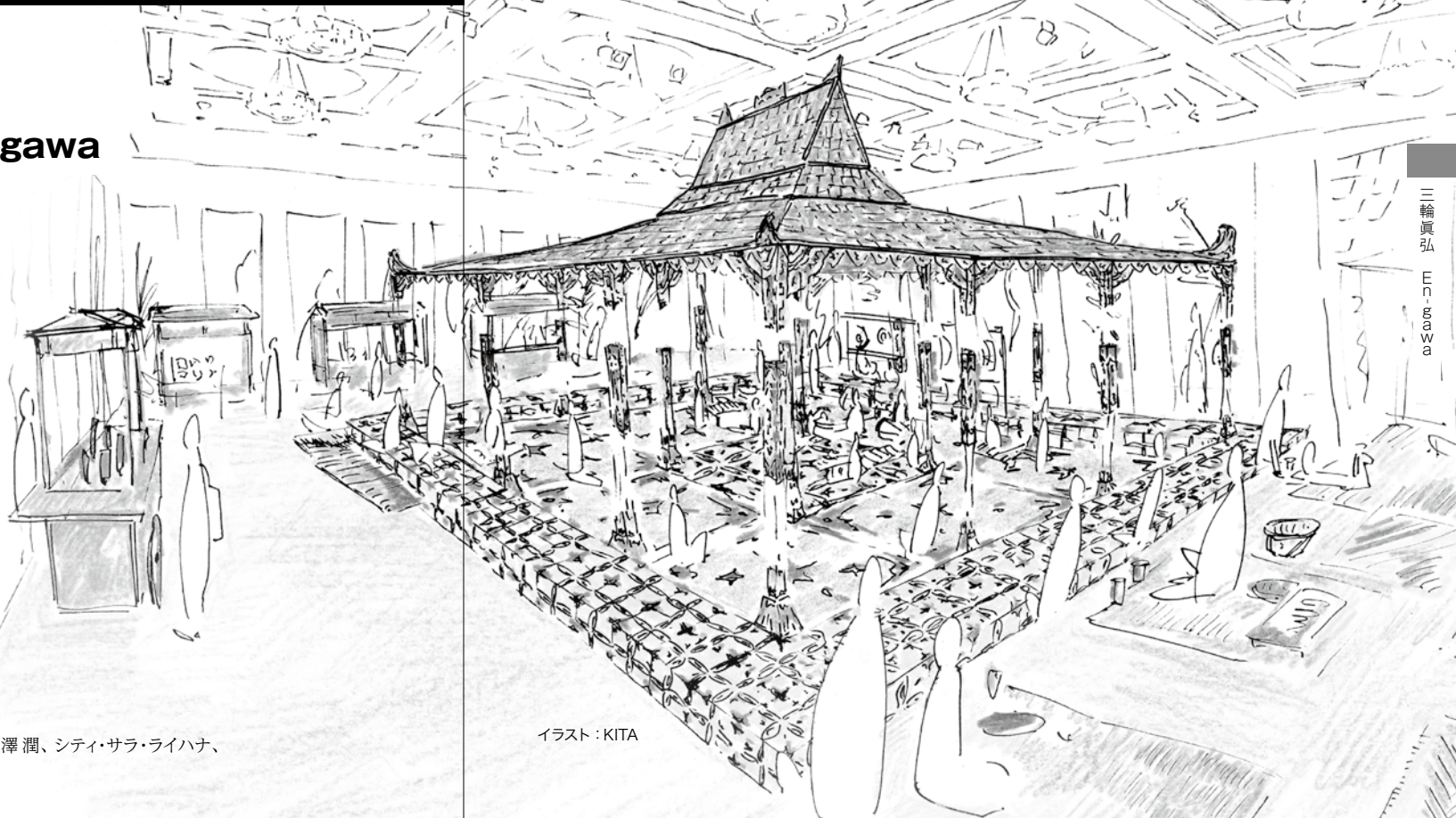
(恵美須屋直樹、大井卓也、黒川岳、谷口かな、中川真、西真奈美、西村彰洋、森山みどり)

Marga Sari, Music Direction

(Naoki Ebisuya, Takuya Oi, Gaku Kurokawa, Kanna Taniguchi, Shin Nakagawa, Manami Nishi, Akihiro Nishimura and Midori Moriyama)

●企画協力：蛍光資料

keikoushiryou, Planning Assistance



イラスト：KITA

協力：情報科学芸術大学院大学[IAMAS]、甲賀市碧水ホール、ササマユウコ(芸術教育デザイン室CONNECT/コネクト)
制作協力：瀧美雅史、アンディ・アフマド・ナフィ・ナジャムッド、グシト・アルハン・アンゴロ、ダナン・ププット・ドゥイ・ワホノ、
デブット・サスミト・パンチェル、ヒルマン・ルトフィ・ギファリ、ピウス・サトリオ・ジャティ・クスモ、マガス・ガルデナ、
ユディスティラ・プルワ・アヌグラ

バナーデザイン：濱祐斗デザイン事務所

参考：R.イスマンダー K.「ジョグロ：ジャワの伝統家屋建築」

特別協力：常陸太田市水府地区西和田のみなさん

Supported by Institute of Advanced Media Arts and Sciences [IAMAS], Hekisui Hall, Yuko Sasama

Production cooperated by Andi Ahmad Nafi Najamudd, Danang Puput Dwi Wahono, Dhebut Sasmito Pancer, Gesito Arhant Anggoro, Hilman Luthfi Ghifari, Magas Gardena, Masashi Atsumi, Pius Satrio Jati Kusumo, Yudhistira Purwa Anugrah

Banner designed by YUTŌ HAMA DESIGN

Special thanks to residents of Nishiwada, Suifu, Hitachiota city

Reference: R. Ismunandar K., Joglo: Arsitektur Rumah Tradisional Jawa, third edition 1990

常設プログラム

「越境屋台」と「ポップアップ露店」

境界を越えてサントリーホールに迷いこんだ屋台と、どこからかポップアップしてきた路上の露店。En-gawaに関わる音楽家やアーティストたちの掘り出し物に出会えるかもしれません。

三輪眞弘による「ありえるかもしれない、ガムラン」

1) Thinking Machineによる「時報」
 マーティン・リッチズとの共同制作によるサウンド・インスレーション作品のガムラン・バージョンを展示。
 所蔵：東京大学駒場博物館
 Thinking Machine ガムラン・バージョン：松本祐一

2) 映像と演奏家による「修行」

スクリーンに映し出された映像上のガムラン奏者と生身の演奏者(マルガサリの大井卓也・西村彰洋・谷口かな(映像))による三輪眞弘の「4ビット・ガムラン」の共演。
 映像制作・オペレーション：後藤 天

3) 鶏人間と鶏のケチャによる「礼拝」

ジャワ舞踊家、佐久間新のアバターと、佐久間新本人との共演。仮想的な鶏5羽が、佐久間新の後を追って歩く。相愛大学の有志4名によるドレミパイプの演奏を伴うAR(拡張現実)空間上のパフォーマンス。
 ARシステム開発：伏田昌弘(東京コンピュータサービス株式会社)
 開発サポート：新垣隆海

En-gawaは、開館中はいつでも自由に出入りいただけます。

右記に予定されている演目の合間の時間帯にも、即興のパフォーマンスなど、何かしらのイベントが絶えず行われています。各イベントは、おおよその時間になると自然とゆるやかに始まります。

※ 各演目の開始・終了時間はあくまでも目安となります。
 ※ 常時出入り自由につき、明確な休憩時間は設けられておりません。



8.25(金) Friday, August 25
 13:00~20:00

● 13:30~15:00頃

野村 誠
 「ガムランによる即興クリエイション」

大ホールでのコンサートでも作曲・指揮を務める音楽家、野村誠による即興ガムラン公開ワークショップ。即興舞踊の達人ベン・スバルト、作曲家のスタント、メメット・チャイルル・スラムメットなど、インドネシアのクリエイターたちの方法を参照しつつ、様々な音の実験を行います。

● 16:00~17:00頃

アートプロジェクトを巡るクロストーク

ジョグジャカルタを拠点に活動し、Engawaのアートディレクションを担当するコレクティブ「KITA」の北澤潤と、東京・千住を拠点とするアートプロジェクト「千住だけじゃれ音楽祭」のディレクターを務める野村誠による対話。インドネシアの最新のアート事情も聞けるかもしれません。

● 18:00~18:45頃

「ありえないかもしれないガムラン・コンサート」

野村誠と、東京・千住を拠点に活動する音楽グループ「だけじゃれ音楽研究会」によるガムラン・コンサート。ガムランの古典曲は一切ありません。ガムランの可能性を様々な方向から味わう実験的な音楽会です。

● 19:00~20:00頃

ナイトプログラム 座談会
 「ガムラン・アセンブリー」第1夜

ホスト：三輪眞弘
 ゲスト：桑原ゆう、田中弘基、松本淳一、向井 航
 (「第33回芥川也寸志サントリー作曲賞選考演奏会」の作曲家4名)

8.26(土) Saturday, August 26
 13:00~20:00

● 13:00~16:00頃

デモンストレーション&ミニレクチャー、体験コーナー

「パラグナ・グループ」と「マルガサリ」による楽器体験コーナー。スダ(ジャワ島西部)のガムラン・ドゥグンと、ジャワ島中部のジャワ・ガムラン。2つのガムランに実際に触れて、聴いて、体験してみましょう。

● 16:00~17:00頃

マルガサリによる創作パフォーマンス公演

大ホールでのコンサートのほか、En-gawaのミュージック・ディレクションを担当するジャワ・ガムラングループ、マルガサリの公演。「ガムランを用いたあらゆる表現活動に取り組む」ことをテーマに活動を続けてきたマルガサリによる、実験的なパフォーマンスを上演します。

● 17:30~18:45頃

パラグナ・グループによるコンサート

東京を拠点にガムラン・ドゥグンの演奏活動を行っているパラグナ・グループにより、ルー・ハリソンやジョン・ケージといったアメリカ実験作曲家の作品とともに、藤枝守の組曲『ガムラン曼荼羅』が浅野瑞穂の舞踊をともなって演奏されます。En-gawaに「響きの曼荼羅」が出現します。

● 時間不定

クルクルによるチャルンの演奏

中部ジャワ・パヌユムス地方の竹のガムラン「チャルン」のグループ「クルクル」による演奏を行います。

● 19:00~20:00頃

ナイトプログラム 座談会
 「ガムラン・アセンブリー」第2夜

ホスト：三輪眞弘
 ゲスト：小出稚子、野村 誠、藤枝 守、宮内康乃
 (「Music in the Universe」の作曲家4名)

8.27(日) Sunday, August 27
 10:00~17:00

● 12:00~13:00頃

佐久間 新による
 ダンスパフォーマンス

伝統的なジャワ舞踊をベースに、新しいダンスの創作や、障害のある人をはじめ様々な身体をもつ人たちの踊りの取り組みを続けてきた舞踊家、佐久間新によるパフォーマンス。空間全体をつかったダンスを通じ、En-gawaの場に秘められた可能性を引き出します。(本プログラム以外にも、25~27日の3日間、即興的なダンスパフォーマンスが行われる可能性があります)

● 14:00~16:00頃

川村亘平斎による
 影絵パフォーマンス

インドネシア・バリ島の伝統的な影絵芝居「ワヤン・クリット」を現代的にとらえなおし、新たな表現を生み出している影絵師/音楽家の川村亘平斎による影絵パフォーマンス。En-gawaに現れる巨大なスクリーンを舞台に、音楽と影が織りなす不思議な世界を生み出します。
 (共演：HAMA、トンチ/滞空時間)



8.27

(日) 17:00 大ホール
 Sunday, August 27 at 17:00 / Main Hall

Music in the Universe

藤枝 守 ● 『ピアノとガムランのためのコンチェルト no.2』 (2023)
 Mamoru Fujieda [世界初演 サントリーホール委嘱]
 (1955-) *Concerto for piano and gamelan no.2* [World Premiere, commissioned by Suntory Hall]

- Piece I
- Piece II
- Piece III
- Piece IV

ガムラン：マルガサリ
 Marga Sari, Gamelan Jawa
 ミニピアノ：砂原 悟
 Satoru Sunahara, Mini Piano

宮内康乃 ● 『Sin Ra』
 Yasuno Miyauchi ジャワ・ガムランと声のために (2023) [世界初演 サントリーホール委嘱]
 (1980-) *Sin Ra*
 for Javanese Gamelan and Voices [World Premiere, commissioned by Suntory Hall]

- I. 水 -Jala
- II. 風 -Vayu
- III. 地 -Prithvi

ガムラン：マルガサリ
 Marga Sari, Gamelan Jawa
 声：つむぎね ルバブ：ほんまなほ
 Tsumugine, Voices Naho Homma, Rebab

ホセ・マセダ ● 『ゴングと竹のための音楽』
 José Maceda ガムランと龍笛(ピッコロ)、コントラファゴット、打楽器、合唱団のための (1997)
 (1917-2004) *Music for Gongs and Bamboo*
 for Gamelan, Ryuteki (Piccolo), Double Bassoon, Percussion and Chorus

指揮：野村 誠 ガムラン：マルガサリ
 Makoto Nomura, Conductor Marga Sari, Gamelan Jawa
 龍笛：伊崎善之 コントラファゴット：中川日出鷹
 Yoshiyuki Izaki, Ryuteki Hidetaka Nakagawa, Double Bassoon
 打楽器：中谷満と「相愛大学音楽学部打楽器合奏団」
 Mitsuru Nakatani and "Soai University Percussion Group," Percussion
 東京少年少女合唱隊
 The Little Singers of Tokyo

————— 休憩 intermission —————

小出稚子 ● 『Legit Memories (組曲 甘い記憶)』 (2023)
 Noriko Koide [世界初演 サントリーホール委嘱]
 (1982-) *Legit Memories* [World Premiere, commissioned by Suntory Hall]

- I. Langgam "Wedang Ronde" Slendro
- II. Interlude "Roti Bakar" Slendro & Pelog
- III. Langgam "Kelapa Muda" Pelog
- IV. Interlude "Es Buah" Slendro & Pelog
- V. Langgam "Pisang Goreng" Slendro

ガムラン：マルガサリ 歌：さとうじゅんこ サクソフォーン：植川 縁
 Marga Sari, Gamelan Jawa Junko Satoh, Vocal Yukari Uekawa, Saxophone

野村 誠 ● 『タリック・タンバン』 (2023) [世界初演 サントリーホール委嘱]
 Makoto Nomura *Tarik Tambang* [World Premiere, commissioned by Suntory Hall]
 (1968-)

ガムラン：マルガサリ ウイスキーボトル：だじゃれ音楽研究会
 Marga Sari, Gamelan Jawa Dajare Music Community Band, Whisky Bottles
 相撲(すもう)：岩本真輝 相撲(すまい)：佐久間 新
 Masaki Iwamoto, Sumo Shin Sakuma, Sumai
 声：鶴見幸代 ルバブ：ほんまなほ
 Sachiyo Tsurumi, Voice Naho Homma, Rebab
 合図：野村 誠 合唱：東京少年少女合唱隊
 Makoto Nomura, Cue The Little Singers of Tokyo, Chorus

●藤枝 守 (1955~)

『ピアノとガムランのためのコンチェルトno.2』(2023)

ガムランに興味をもつようになったのは、アメリカの作曲家であるルー・ハリソン(1917~2003)からの影響でした。1980年代にハリソンに出会い、あらたな音律の可能性やメロディの重要性を知るようになり、それまでの自分自身の作曲の方向性が一変したのです。ハリソンは、しばしば、音楽や文化が必然的にもつ混合性や複合性について語り、ハリソンが晩年に出会うことになるガムランによって「超民族」的な世界が一気に拓かれていきました。

このようなハリソンの世界を継承しながら、ガムランによる「コンチェルト」という形式でいくつかの作品を発表してきました。そして、昨年には、今回のソリストでもある砂原悟さんを通じて出会ったミニピアノとガムランによる「ピアノ・コンチェルト」が福岡で初演されました。

このミニピアノは、トイピアノと混同しそうですが、全体のサイズが縮小されただけで、本来のピアノのメカニズムがしっかりと施されています。第二次世界大戦後の資材難の状況下で、河合楽器製作所は技術の継承をひとつの目的として「ミニピアノ」を世に出しました。生産台数も限られ、現在では忘れ去られた存在でしたが、数年前に砂原さんがこの希少なピアノを偶然に発見して、蘇らせたのです。

単弦であるミニピアノは、調律もかんたんで、また、ハーブやリュートのように響き、ガムランに溶け込むように思えたのです。そして、ガムラン・ドゥグンの様式による「パラグナ・グループ」と砂原悟さんによって演奏された『コンチェルトno.1』では、平均律のミニピアノとガムランとのわずかなピッチの偏差が多様なうなりを発生させていったのです。

今回、マルガサリの演奏による『コンチェルトno.2』では、ジャワ・ガムランの「ペログ」旋法の鍵盤だけを使用し、その旋法のピッチに基づくミニピアノの調律を試みます。全体は、四つの楽曲により、それぞれは4小節のユニットからなる8個のフレーズによって構成されています。このような楽曲形式は、『ガムラン曼荼羅』という作品を引き継いだものですが、ステージ中央にミニピアノが置かれ、曼荼羅に見立てた個々のガムランの楽器がミニピアノに向かって円環的に配置されます。じつは、このミニピアノは、ひとつの仮想のガムランを宿

したものとして見立てられて、入れ子構造となった二つのガムランが響きの文様を織り込んでいきます。

なお、この作品のすべてのメロディック・パターン生成には、植物の電位変化のデータを変換する「植物文様」の手法が用いられて、今回は、福岡市・香椎宮の御神木「綾杉」のデータが採用されています。

[藤枝 守]

Mini Piano / Saron Peking / Saron Barung / Saron Demung / Bonang Barung / Bonang Panerus / Slentem / Gong

●宮内康乃 (1980~)

『Sin Ra』

ジャワ・ガムランと声のために (2023)

タイトルの「Sin Ra」は、「森羅万象」を意味しています。ガムランとは、万物を抽象化した象徴であると私は捉えており、この世の全て(宇宙)の円環構造を表していると感じます。生きとし生けるもの、生命の循環と自然界の巡りを描きたいと考えたこの曲では、仏教における、世界を構成する五大要素である「地・水・火・風・空」をテーマとし、その中から「水」「風」「地」の3つを楽曲化しました。よって将来的に「火」「空」も作曲することを目指しています。

楽曲は全て、・1・5・6・3・5・2・3・⑥という短い1つのバルンガン(骨格旋律)のみで構成されています。また、ガムランにはスレンドロ、ペログと2つの音階があり、古典曲では基本別々に使用しますが、この曲では時に重ね、それにより生まれる響きのズレやうなりを活かしています。3つの楽曲はそれぞれ独立して演奏可能ですが、私の表現の特徴として、一連をつないで1つのパフォーマンスとなるように構成しています。それは人々が長年行ってきた祭りや儀礼のように、音楽と踊りや祈りが渾然一体とし、観客と演者の境が曖昧な、より自然な表現だと捉えているからです。

それから、ガムラン音楽が持つ特徴を極力活かしたいと努めました。相似形構造、セレ*1に落ちる感覚、Irama*2の変化によるマクロとミクロの世界観や時空の伸び縮み、「インバル」「コテカン」などと呼ばれるインターロッキングな音構造、といった魅力的な特徴を取り入れ、自身の作曲法との融合を試みました。特に、「コミュニケーション音楽」であるという、2つの共通項であり、ガムラン音楽の最も神髄である部分を大切にしたいと考え、楽譜で

はなくルールベースで作られています。そのため、他者とのやりとりで生み出される旋律やリズムは無限の組み合わせを持ち、誰かの合図で流れが多様に変化する「生きた音楽」が生まれる構造になっています。それは、私はあくまでも演奏を通して他者と、そして世界と“深く響き合う”ことを一番の目的としているためです。この複雑で多忙な現代に、それでも誰かと集い、音を重ねて響き合うということの“意味”を、私は音楽を通して発信していきたいのです。ガムランとの出会いによって、その生涯をかけた命題の、新たな道筋が見えてきたと感じています。

[宮内康乃]

*1 セレ：一連の旋律の終始音

*2 Irama：テンポの変化を音の密度で表現すること（用語解説：中川 真）

Gender Panerus / Gender / Rebab / Kendang dua / Ciblon / Saron Barung / Saron Demung / Slentem / Bonang Panerus / Bonang Barung / Ketuk / Kenong / Kempul / Gong / Voices / Melodicas / Genterak / Tingsha / Ceng Ceng / Kajar



ノート全文はこちら

●ホセ・マセダ (1917~2004)

『ゴングと竹のための音楽』

ガムランと龍笛(ピッコロ)、コントラファゴット、打楽器、合唱団のための (1997)

「もし音楽が一つの言語であり、文化や環境に結びついた統合的な歴史をもつと認められるならば、音楽には基本構造があり、その最も単純なカタチがドローンとメロディになるだろう」

(ホセ・マセダ『ドローンとメロディ』新宿書房 1989 高橋悠治編・訳)

ドローンとは短い音型の反復であり、メロディはその反復の中から浮かび上がってくる音高の列である。『ゴングと竹のための音楽』では、ガムランや竹楽器が複雑にして繊細なリズムでドローンを形成し、そこから抽出されたであろう旋律を合唱、龍笛、コントラファゴットが主に担う。

合唱のテキストとしては俳句が引用されている。

よらで過る藤沢寺のもみぢ哉 蕪村
つじ咲て片山里の飯白し 蕪村
看経の間を朝顔の盛り哉 許六
朝がほや人のかほにはそつがある 一茶
ひよろひよろとなほ露けしや女郎花 芭蕉

本作はかなり変則的な編成となっているが、その背景を述べておこう。1991年に千人の参加者を要する『ウドロツ・ウドロツ』を日本初演したのち、私はガムランのための新作を委嘱したのであるが、このオファーはマセダの強い拒否によって退けられた。「ガムランは王宮の、つまり権力者の音楽であり、それに携わることはできない」というのである。けんもほろろといった体である。しかしマセダだったらどんなガムラン音楽をつくるのだろうという興味は募るばかりであった。何年経っても返事は同様、困り果てた私は一計を案じた。「確かにガムランは権力に近い音楽だが、その関係を解体することは大きな意味があり、それはあなたにしかできない」と言ったのである。これにはマセダも「確かにそうだ」と言いながら「他の楽器を加えてもいいか?」と尋ねるので、「もちろん大丈夫」と答えた。そして送られてきたのが、本作の総譜であった。

では、ガムランの権力性はどのように解体されているのだろうか。私なりの見方をすれば、竹楽器ほか多くの異なった楽器を加えることによって、ガムランは中心ではなくなっている。そのガムランに目をやれば、クンダン、ルバブ、ポナンといったいわゆる花形楽器は消えている、といったように周縁化の意図は明白である。さらにガムラン音楽ではあり得ない「指揮者」が存在する。しかし、それでもなお全体として「ガムラン音楽のように」きこえるのはなぜだろう。

[中川 真]

Gender / Saron / Ketuk / Kempul / Suwukan / Ryuteki (Picc) / C-Fg — Bamboo Instruments (Buzzer / Clapper / Scraper / 2 Sticks / 2 Tubes / Shaker / Whistle) — Chorus

初演 1997年11月8日 京都国際交流会館

ホセ・マセダ(指揮)、ダルマブダヤ+野村 誠(ガムラン)、三宅由紀(龍笛)ほか

●小出稚子 (1982~)

『Legit Memories (組曲 甘い記憶)』 (2023)

題名は「甘い記憶」という意味で、松田聖子の名曲「SWEET MEMORIES」からもじりました。ジャワの甘味の名がついた5つの小品からなる組曲で、昔ミッドタウンの虎屋で催されていた数種類の和菓子に大友良英さんが音楽をつけるという展示や、湯山昭さんのピアノ小品集「お菓子の世界」のような感じで、音楽で甘味を描いています。このうち3曲はLanggam—ジャワの大衆歌謡曲。ガムランで伴奏されることも多く、

西洋音楽のイディオムと伝統的な音楽理論が良い塩梅で同居する——で、残りの2曲は歌と歌をゆるやかに繋ぐ間奏曲です。自分の好きなジャワのスイーツをしみじみと愛でる枕草子的な作品を作りたいと思い、歌詞では各甘味を擬人化したり、音楽では各々の甘味の持つ特徴や行きつけのワルンの雰囲気を再現してみたり。とにかくできるだけ一般化せず、私が愛する“あのお店のあの一品”を音楽と言葉で語り尽くすプライベートな作品です。

最近「境界の曖昧さ」を作曲上のテーマとしており、複数の世界の間を揺れ動くというのもこの作品の音楽的な特徴の一つです。pelogとslendro——ガムランの2つの音階を行き来し、時には重なる——、barang miring——“傾く”という意味を持ち旋法構成音以外の音を加え陰影をもたらす手法を応用する——、西と東——西の楽器であるSaxophone、ジャワと西洋の両方のスタイルを行き来する歌い手、そして伝統の粹組みをじわじわと拡張してゆくガムラン——、母国語と外国語——日本語とインドネシア語——、歌曲と器楽曲——LanggamとInterlude——など、できるだけ境界をぼかし、各々の音楽世界の濃度を濃くしたり薄くしたりすることで様々な世界への滑らかな接続を試みています。天気雨のような音楽をお楽しみください。

“Wedang Ronde” ウェダン・ロンデ：

温かくて甘い生姜スープにピーナッツ餡の入った白玉やコランカリンの実を浮かべたもの。

“Roti Bakar” ロティ・バカル：

パンにチョコレートやチーズ等を挟み、たっぷりのマーガリンと共に鉄板で焼いたホットサンド。

“Kelapa Muda” クラパ・ムダ：

若い椰子の実の中の果肉や果汁（正確にはどちらも胚乳）を飲むさっぱりとした飲み物。

“Es Buah” エス・ブア：

パイアやジャックフルーツ等色とりどりの南国の果物が沢山入った荒削りのかき氷。

“Pisang Goreng” ピサン・ゴレン：

衣をつけて揚げたバナナ。多種多様なバナナの中でも、揚げ物に適した品種が使われる。

[小出稚子]

Vocal / S-Sax / Gender / Gambang / Kendang / Saron Peking / Saron Barung / Saron Demung / Slentem / Bonang Panerus / Bonang Barung / Ketuk Kempyang / Kenong / Kempul / Gong / Siter – Tape

作詞協力 Sumiyanto / Darsono Hadiraharjo
協力 木村佳代 / 加藤駿吾

[歌詞]

“Wedang Ronde ヴェダン・ロンデ”

Keprabonに明かりが灯る夜
黄金色の透明なお湯に浸かり目を閉じる
月 蕾 浮かぶスープ Wedang ronde
ほどけてゆく身体

“Kelapa Muda クラパ・ムダ”

Layaknya cincin astagina 天国の水 割って入ってきなさい
terhampar didalamnya 逢いたいのなら belanjanmu dalam tempurung cinta
霞む視界 kering kerontang 影のない下り坂
keringat dan dahaga 逃げ水 serpihan surga 空から落ちる
membanjiri selaput 床に滲む
meluluh lantahkan lelah dahaga, kelapa muda yang kudamba

豊かな水瓶 air surga 内に広がる世界
belahlah dan temukan kenikmatan tiada tara 貴方の欲しいものは全て分厚い殻の中
jalan terjal 湯き debu dan panasnya matahari
照り返し fatamurgana merayu つるりと滑る白い果肉
laksana mukzijat 破水の時
meluluh lantahkan lelah dahaga, kelapa muda yang kudamba

“Pisang Goreng ピサン・ゴレン”

Pisang goreng manis
Pisang goreng tidak bisa berhenti
Meskipun makan banyak tambah lagi
Melengkung menawan tubuh mu lembut di mulutku
Bukan mannga bukan jambu tapi kamu

●野村 誠 (1968~)

『タリック・タンバン』 (2023)

相撲は音楽で、音楽は演劇で、演劇は対話で、対話は誤解で、誤解は創造で、創造はオープンで、論理と感情の綱引きを越えて、閉ざされた作曲の扉を開きたい。

三輪眞弘さんから、「ありえるかもしれない、ガムラン」というお題をいただき、ぼくはガムランについて深く考えた末に(詳しくはノート全文を参照)、「だじゃれガムラン相撲間芸術」なるものを想像した。

無関係な関係をさせるのが「だじゃれ音楽」。音韻連想は意味を越え、違ったものを結びつける。音楽が論理に回収されるのではなく、音のつながりが論理を超える。

ガムラン(カラウィタン)の歌詞にも「だじゃれ」的なダブルミーニングは頻出するが、相撲甚句の歌詞にも、だじゃれが出てくる。竹野相撲甚句(兵庫県)は、「みなみにきた」と歌う。これは「南に北」と「皆、見に来た」をかけている。ちょっと待てよ!「南にKITA」か!(KITAはEn-gawaコンサートをディレクションしたコレクティブで、インドネシア語で「私たち」の意味。)

「私たち」。ぼくは、共同作曲=「私たちの音楽」を追求してきた。インドネシアで過ごす、「私」と「私たち」の境界がどんどん溶解していく。野村誠作曲というけれども、野村誠と「つながる」数多くの人々が一緒に考えて作曲する土俵を作っているのが、ぼくの仕事。「つながる」=「綱がる」=「綱がある」

南九州には、「十五夜綱引き」の風習がある。お月見があり、綱引きがあり、綱で土俵をつくり相撲をする。塔本シスコ(1912~2004)の描いた『フレ川綱引き』に触発されて、今年5月に不知火美術館(熊本県宇城市)で荒井良二さんと観客と一緒に綱引きをした。綱引きはドロー

イングのようであり、多様な人が一本の綱でつながった光景は感動的だった。コンサートホールの空間に、綱でドローイングができるか?多様な人がつながれるか?

相撲は大地を踏みしめる儀式で、四股は反^{へんばい}閤で、折口信夫によれば、演劇の源流を遡ると平安時代の相撲節会に辿り着く。四股を踏む。体を傾ける。耳を傾ける。ウイスキーボトルを傾ける。

ボトルを傾け、中のウイスキーが揺れると、音が揺らぐ。角瓶とゴルフの出会い音。日本のウイスキー100年の2023年。ボトルが四股を踏む。角瓶ガムランとジャワ・ガムランの共演。ウイスキーよ、響け!

お名残惜しうは候えど

原稿終わりにせにゃならぬ

いつまたどこで会えるやら

それともこのまま会えぬやら

思えば涙がパラリパラリと

はあ どすこい どすこい

Special thanks to 日本相撲間芸術作曲家協議会(JACSHA)、日本大学相撲部、松田哲博さん(元・一ノ矢)、城崎国際アートセンター、與田政則さんほか竹野相撲甚句を教えていただいた方ほか、様々な創作の種を与えて下さった方々。

[野村 誠]

Gambang / Saron Peking / Saron Barung / Saron Demung / Slentem / Gender Barung / Gender Panerus / Bonang Barung / Bonang Panerus / Kenong / Kempul / Suwukan / Gong Ageng / Kendang Jawa / Kendang Bali / Keprak / Ketuk Kempyang / Rebab / Suling / Suntory Whisky Bottles / Golf Balls / Rope / Sumo / MC / Chorus



ノート全文はこちら


藤枝 守 Mamoru Fujieda (1955-)

カリフォルニア大学サンディエゴ校音楽学部博士課程修了。博士号(Ph.D.)を取得。湯浅譲二やモートン・フェルドマンらに師事。植物の電位変化データに基づく『植物文様』を展開。著書に『[増補]響きの考古学』、『響きの生態系』など。CDにはTZADIKから『The Night Chant』などの3枚のアルバムやサラ・ケイヒルのピアノによる『Patterns of Plants』、砂原悟による『クラヴィコードの植物文様』、西山まりえによる『ルネサンスの植物文様』、パラグナ・グループによる『ガムラン曼荼羅』など多数。『甕の音なひ』、『織・曼荼羅』、モノオペラ『八雲の向日葵』、現代神楽『玉垂』などの舞台作品も手がける。2022年に福岡ガムラン・フェスティバルを開催。23年5月には自由学園明日館にて『両界ガムラン曼荼羅』を開催。20年まで九州大学大学院芸術研究院教授。現在、九州大学名誉教授。喜界島サンゴ礁科学研究所特別研究員。



© KENJI KAGAWA

宮内康乃 Yasuno Miyauchi (1980-)

東京学芸大学G類音楽科作曲専攻卒業、IAMAS(情報科学芸術大学院大学)メディア表現研究科修了。楽譜を使わず、人間の呼吸や身体のリズムをきっかけに音を紡ぎ出していくような、独自の方法論で作曲する。主宰する声のアンサンブルグループ「つむぎね」の音楽パフォーマンスを多数制作するほか、邦楽や日本の仏教音楽『聲明』の作曲にも取り組む。2011年第6回JFC作曲賞受賞。16年Asian Cultural Councilグランティ選出にてNY滞在。18年国際交流基金アジア・フェローの助成を受け、半年にわたり東南アジア4カ国を滞在リサーチした経験から、ガムラン音楽の構造や社会的役割を再認識し、20年度高知県立美術館の企画にて高知の小学生のために、ガムラン曲『カメカメ Kura-kura』を作曲。高知で眠っていたガムランが目覚め、教育現場や地域コミュニティをつなぐ役割を持つきっかけとなり、反響を呼んだ。


ホセ・マセダ José Maceda (1917-2004)

フィリピン出身の作曲家、音楽民族学者、ピアニスト。マニラでピアノを学んだあと渡仏、パリでナディア・ブーランジェ、エコール・ノルマル音楽院でコルトー、ダンドゥロに師事(1937~41)。故国、フランス、アメリカでピアニストとして活動したのち、ニューヨーク市立大学クイーンズ校、コロンビア大学で音楽学(50~52)、シカゴ大学で人類学、インディアナ大学で音楽民族学をそれぞれ修め(57~58)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校で博士号を取得(63)。フィリピン大学で教えながら、東南アジアでフィールドワークを重ねる。60年代から作曲を開始、20のラジオ局で同時に放送される録音を受信機を持ち寄って聴く『ウグナヤン』(74)、数千人での演奏も可能な竹楽器と声のための『ウドゥロ=ウドゥロ』(75)では、聴衆をコンサートホールから解放し、聴き手と演奏者の境を取り払った。ドローン(持続音)と緩やかに交替するテクスチャが生む繊細な色彩、周囲の環境音と親和する風通しのよさをそなえたその作品は、高橋悠治らによって継続的に日本に紹介されてきた。サントリーホール国際作曲委嘱シリーズでは『ディステンペラメント(平均律の解体)』(92)を作曲。 [平野貴俊]


小出稚子 Noriko Koide (1982-)

東京音楽大学、同大学院修了後2009年に渡蘭。ローム ミュージックファンデーション、文化庁新進芸術家海外研修制度、ハーグ王立音楽院特待生奨学金の助成を受け、アムステルダム音楽院およびハーグ王立音楽院作曲科を修了。02年より、東京音楽大学とアムステルダム音楽院で学び続けてきたガムランをもっと知りたくて、インドネシア政府奨学金および野村財団による助成を受けインドネシア国立芸術大学スカルタ校でジャワガムランを学ぶ。作曲家としては、第17回芥川作曲賞、第18回出光音楽賞など国内外での受賞多数。昨年はBBC Radio 3の委嘱による新作『揺籠と糸引き雨』がBBC交響楽団により世界初演された。今年度より第4代名古屋フィルハーモニー交響楽団コンポーザー・イン・レジデンスに就任。東京音楽大学民族音楽研究所研究員。


野村 誠 Makoto Nomura (1968-)

人や場との交流から音楽を生み出す作曲家。叙情的で、社会的で、実験的な音楽を根元まで掘り下げて探求している。1996年、初のガムラン作品『踊れ! ベートーヴェン』をインドネシア4都市で上演。98年、人類学博物館(パリ)でガムランワークショップ。2001年ガムランシアター『桃太郎』(work in progress)をマルガサリと共同制作開始。04~09年、東南アジアのアーティストとの即興コレクティブPicnicをタイ、インドネシア、オーストリア、日本で展開。13年、インドネシアとタイで原発と共同作曲に関するプロジェクト。16年、インドネシアとの瓦による音楽国際交流企画Musik Genteng実施。千住だじやれ音楽祭(2011~)、日本センチュリー交響楽団「コミュニティプログラム」(14~)、ガチャ・コン音楽祭(20~)のディレクター。日本相撲聞芸術作曲家協議会(JACSHA)理事。著書に『音楽の未来を作曲する』(晶文社)ほか。



© Hitoshi Furuya

ガムラン・ドゥグン：パラグナ・グループ

Paraguna Group, Gamelan Degung

1985年結成。インドネシア・スダ(西ジャワ)音楽のグループとして、東京を拠点にガムラン・ドゥグン、トゥンパン・スダの演奏活動を行っている。スダの音楽家との共演も多く、インドネシアのガムラン・フェスティバルに多数参加。古典曲のほか、ルー・ハリソンや藤枝守作曲の現代作品も精力的に演奏し、幅広い活動を展開している。2021年、CD『ガムラン曼荼羅／藤枝守』(MAM-0003)をMilestone Art Worksより発売。YouTube「Paragunaチャンネル」を開設し随時配信中。

<http://www.paraguna.com>



竹のガムラン「チャルン」：クルクル

KULU-KULU, Gamelan Bamboo "Calung"

インドネシア・中部ジャワ・パニユマス地方の竹のガムラン「チャルン」を演奏するグループ。ガムラングループ・ランバンサリのチャルン講座を母体とし、インドネシア国立芸術大学 (ISI) スラカルタ校教授、ダルト・カルタウィにより2018年に命名された。「KULU-KULU」は代表的な曲の名前で、パニユマス音楽の信条であるエネルギー溢る演奏ができるようにという願いが込められている。パニユマスを数回訪れ、現地の演奏家との交流演奏会にも出演。メンバーは木村佳代(代表)、加藤駿吾、川口明子、福田雅希、牧野明子、三村久美子、村上圭子、安則京子、柳川智子、ほか。



打楽器：中谷満と「相愛大学音楽学部打楽器合奏団」

Mitsuru Nakatani and "Soai University Percussion Group," Percussion

中谷満と「相愛大学音楽学部打楽器合奏団」は年に一度の定期演奏会を中心に、地域や中高生のための鑑賞会などを積極的に行っている。2014年以降は提携校であるフライブルク国立音楽大学打楽器クラスと、15年、18年、19年にはフライブルク国立音楽大学や、相愛大学音楽学部にて交流演奏会を行っている。現在、相愛大学音楽学部生、相愛大学大学院音楽研究科生25名で構成されている。今回は中谷満(教授)小野竜聖(院1)花田零(院1)星山理奈(院1)高真炫(大4)鈴木彩葵(大4)川久珠寿(大3)の7名で参加する。



だじゃれ音楽研究会

Dajare Music Community Band

「だじゃれ音楽」という新たな音楽の形態を研究すべく、2012年に発足した音楽団体。足立区千住地域を拠点に、音楽経験・年齢・職業を問わず多様な人々が集い、即興演奏や共同作曲を主軸とした活動を行う。これまでに「千住だじゃれ音楽祭」の一環として、14年に1010人の演奏者によるコンサート『千住の1010人』、15年にタイ・ツアー、16年にインドネシア・ツアー(助成：国際交流基金)を実施。19年にダンス公演『だんだんたんぼに夜明かしカエル』、22年に「1DAYパフォーマンス表現街」にゲスト出演。



舞踊：浅野瑞穂

Mizuho Asano, Dance

中国古典・民族舞踊を学び、北京公演などで活躍。その後、日本の古典・民俗芸能と出会い、その法則・音魂・形魂を学び、オリジナルスタイルの舞『瑞穂舞』を創始する。その天界を舞うような美しい舞スタイルから「天女の舞」と呼ばれる。伊勢神宮・出雲大社はじめ日本全国の神社仏閣に舞を奉納するとともに、海外公演など数々の舞台公演を行う。2003年「浅野瑞穂舞踊研究所スタジオ」開設。主な舞台作品に、朗読活劇『レチタ・カルダ『義経』』『ドラマチック古事記』『舞踊家 浅野瑞穂〜地・水・火・風・空を舞う』(池上本門寺)などがある。



© 早本利枝

舞踊&相撲：佐久間 新

Shin Sakuma, Dance and Sumai

幼少の頃、心理学者の父が自閉症児と転がる姿を眺める。大阪大学でガムランを開始。鈴木昭男、野村誠らに衝撃を受ける。ベン・スハルトのいるインドネシア国立芸術大学へ留学。帰国後、ガムラングループや様々なダンサーと活発に活動。たんぼぼの家の障害者との出会い以降、マイノリティの人との即興ダンスに傾注。振付『PATINA』(2018)OzAsia Festival招聘、演出『だんだんたんぼに夜明かしカエル』(19)、野村誠と砂連尾理との問題行動トリオ in 十和田市現代美術館(21~22)など。



影絵: 川村 亘平齋
Koheysai Kawamura, Shadow Puppetry

影絵師・音楽家。インドネシア・バリ島の伝統影絵「ワヤン・クリット」を現代的な文脈で捉え直し、新たな芸能のカタチを模索し続ける影絵師。日本各地でフィールドワークやワークショップを行い、土地の記憶を手がかりに影絵作品製作。音楽ユニット「滞空時間」主宰。第27回五島記念文化賞美術新人賞受賞。北海道庁主催『北の絵コンテ大賞』受賞(2021)。テレビ東京「東京交差点」出演(22)。『福田うみやまこばなし』(瀬戸内国際芸術祭/22)、ストラヴィンスキー『兵士の物語』(演出・出演/東京藝術大学/22)ほか。

<https://www.kawamurakoheysai.com>



箏笛: 伊崎 善之
Yoshiyuki Izaki, Ryuteki

雅楽演奏家/横笛、左舞、楽琵琶奏者。東京都出身。高校入学時より雅楽を始め、東京藝術大学音楽学部卒業。在学中に横笛を越後眞美、古代歌謡を東儀雅季、左舞を岩波孝昌に師事し、卒業後に横笛を芝祐靖に師事する。2009年には同大学非常勤講師。これまでにアメリカ、イギリス、パリ、中国、韓国をはじめ、文化庁舞台芸術国際フェスティバル、サイトウ・キネン・フェスティバル松本など国内外の多くの公演に出演。映画『源氏物語 千年の謎』『瀬戸内海賊物語』やアニメ『平家物語』などのレコーディングにも参加するなど、横笛奏者として幅広い演奏活動を展開している。雅楽演奏団体「伶楽舎」に所属し、小学校・博物館を含めた教育機関への指導・演奏など、後進の育成も積極的に行っている。



コントラファゴット: 中川 日出鷹
Hidetaka Nakagawa, Double Bassoon

日本フィルハーモニー交響楽団ファゴット奏者、Ensemble FOVEメンバー、東京音楽大学非常勤講師。京都市立芸術大学卒業。パリ地方音楽院、フランクフルト音楽舞台芸術大学大学院およびドイツ、アンサンブル・モデルン・アカデミー修了。京都市芸術文化特別奨励賞受賞。明治安田クオリティオブライフ文化財団海外音楽研修生。



サクソフォーン: 植川 縁
Yukari Uekawa, Saxophone

フランス国立リヨン地方音楽院を審査員満場一致の1等賞で卒業後、アムステルダム音楽院にて修士課程修了。ベルギー政府給費奨学生としてгент音楽院現代音楽上級修士課程修了。日本ジュニア管打楽器コンクール第1位、キエリ国際コンペティションファイナリスト。クラシック・現代音楽の演奏活動と並行し、即興演奏家としてワークショップやライブ出演を行っている。国内外のガムラン演奏会にサクソ奏者/ガムラン奏者として出演。オランダのガムランアンサンブルWidosariメンバー。日本音楽即興学会会員。



ミニピアノ: 砂原 悟
Satoru Sunahara, Mini Piano

東京藝術大学卒業、同大学院修了、DAAD奨学生としてミュンヘン音楽演劇大学マイスタークラス修了。1984年日本音楽コンクール入選。87年ポルト国際ピアノコンクール入賞。88年クロイツァー賞受賞。2008年マイルストーン・レーベルよりリリースの『クラヴィコードの植物文様』(藤枝守作曲)はレコード芸術誌で準特選。22年12月アクロス福岡 円形ホールにて藤枝守のガムラン・コンチェルトを初演。宮島敏、中山靖子、クラウド・シルデ、小林仁に師事。京都市立芸術大学教授。



ルバブ: ほんまなほ
Naho Homma, Rebab

音・うた・踊りのパフォーマー。ジャワガムラン合奏グループ、ダルマブダヤ、マルガサリのメンバーとして、伝統音楽から新作まで幅広いレパートリーによる国内外での演奏に出演。現在は、Lintang Sisik(リンタン・シシッ)にてジャワ舞踊をまなびつつ、さまざまな背景をもつひとたちと歌、詩、踊りなどの共同創作に取り組みほか、砂連尾理、佐久間新らの演出する舞台作品にてパフォーマンスをおこなう。共著書に『こどものてつがく』『受容と回復のアート』など。大阪大学COデザインセンター教授、アートミーツケア学会共同代表。



歌：さとうじゅんこ

Junko Satoh, Vocal

歌い手。東京藝術大学音楽学部声楽科ソプラノ専攻修了。ジャワ・ガムランのプシンデン(女声歌手)として活動するほか、滞空時間、菜の花楽団、スマリール、七里圭作品などに参加。シャンソンや民謡にも取り組む。グローバリズムの抱える問題に向き合いながら創造力豊かなアートネットワークへの貢献を志す。東京成徳短期大学幼児教育科非常勤講師。サウナー。スモ女。盆踊ラー。
<http://suara.jp>



©igaki photo studio

声：鶴見幸代

Sachiyo Tsurumi, Voice

茨城県坂東市出身。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。コンサート音楽、合唱、映画音楽、相撲聞芸術音楽、伝統音楽の現代風編曲などを手がける。作曲家グループ「クロノイ・プロトイ」として、2009年度第9回佐治敬三賞受賞。作曲家の野村誠、縦山智子とともに、日本相撲聞芸術作曲家協会(JACSHA/ジャクシャ)の理事として、相撲と音楽を結びつけるプロジェクトを2014年より始動。第3回両国アートフェスティバル2017「ぶつかりピアノ/両国門天場所」芸術監督。18年Arts Tropicalにて個展「20世紀/方法/日本/相撲聞芸術/沖縄」開催。琉球古典音楽野村流保存会教師。元・方法マシンメンバー。毎日四股を1000回踏んでいる。

声：つむぎね

Tsumugine, Voices

2008年より作曲家・宮内康乃を中心に結成した、女性たちによる音楽パフォーマンスグループ。主に声を使い、楽譜ではなく、呼吸など身体の有機的なリズムをトリガーにした単純なルールをもとに、空間全体に響きを紡ぎ出していく独自のパフォーマンスを展開する。活動は音楽分野に留まらず、単独パフォーマンスのほか、美術やダンス、演劇など他ジャンルとのコラボレーションや、劇場だけでなく美術館、野外、古民家など多様な空間でのパフォーマンス、ワークショップ、参加者との作品作りなど多岐にわたる。トーキョーワンダーサイト(現トーキョーアーツアンドスペース)主催「Experimental sound, art & performance festival 2008」最優秀賞受賞。

つむぎねウェブサイト：www.tsumugine.com



©LSOT

東京少年少女合唱隊

The Little Singers of Tokyo

ヨーロッパの伝統音楽に基づく音楽教育を目的とする日本初の本格派合唱団として1951年設立。グレゴリオ聖歌から現代作品までレパートリーは幅広い。年2回の定期公演のほか、64年以来海外公演は33回を数える。国内外のオーケストラ、オペラ劇場との共演も多く、C. アバド指揮ベルリン・フィルをはじめR. ムーティ、F. ルイーゼとの共演では高い評価を得た。創立65周年ではイタリアの各地で公演を実施。サン・ピエトロ大聖堂新年ミサでフランシスコ教皇のもと世界の聖歌隊と平和祈願を捧げた。2021年の創立70周年を迎え、「70周年記念コンサートシリーズ2021~23」を実施、ファイナル公演を23年7月9日にサントリーホールで開催。芸術監督/常任指揮者を長谷川久恵が務める。



すもう

相撲：岩本真輝

Masaki Iwamoto, Sumo

鳥取県出身。鳥取城北高等学校相撲部を経て、現在、日本大学相撲部所属。182cm、110kg。文学部社会学科2年生。2023年5月、野村誠作曲『土俵にあがる15の変奏曲』に出演。

指揮&合図：野村 誠

Makoto Nomura, Conductor and Cue

→33頁参照

ガムラン：マルガサリ

Marga Sari, Gamelan Jawa

→15頁参照



テーマ作曲家
オルガ・ノイヴィルト

サントリーホール国際作曲委嘱シリーズNo. 45 (監修：細川俊夫)

Theme Composer
OLGA NEUWIRTH

Suntory Hall International Program for Music Composition No. 45
(Artistic Director: Toshio Hosokawa)

作曲ワークショップ × トークセッション

Music Composition Workshop × Talk Session

8月23日(水) 19:00 ブルーローズ

Wednesday, August 23 at 19:00 / Blue Rose

オーケストラ・ポートレート

(委嘱新作初演演奏会)

Orchestra Portrait (Commissioned Work Program)

8月24日(木) 19:00 大ホール

Thursday, August 24 at 19:00 / Main Hall

室内楽ポートレート

(室内楽作品集)

Chamber Music Portrait

8月28日(月) 19:00 ブルーローズ

Monday, August 28 at 19:00 / Blue Rose



後援：オーストリア大使館 / オーストリア文化フォーラム東京

Under the Auspices of Austrian Embassy / Austrian Cultural Forum Tokyo



助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】
Supported by Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture



オルガ・ノイヴィルト

Olga Neuwirth
(1968-)

「何の賭けにも出ず、みずからを越える一線を踏み出さないならば、退化してしまう。[...] 何よりも重要なのは、恐れをなくすことだ」— オルガ・ノイヴィルトは、反骨精神とエネルギーに満ちたその音楽を通して、自身を取り巻く社会と制度をつねに批判し、さまざまな障壁を力強く突破してきた。

1968年8月4日、オーストリアのグラーツに生まれる。父ハラルトはジャズ・ピアニスト、伯父ゲスタは作曲家・音楽学者。ピアノとトランペットを習うが、交通事故で顎を負傷し、ジャズ・トランペット奏者としてのキャリアを諦める。伯父に作曲を学んだのち渡米。サンフランシスコ音楽院でエリノア・アーマーに学び(86~87)、同地のアート・インスティテュートで絵画・映画を専攻。ウィーン音楽大学でエーリッヒ・ウルバンナーに作曲、ディーター・カウフマン、ヴィルヘルム・ツォープルに電子音楽を学ぶ(87~93)。個人的にアドリアーナ・ヘルツキー(88~89)、ルイジ・ノーノにも師事。パリのIRCAMではトリスタン・ミュライユに学んだ(93~94)。91年、エルフリーデ・イエリネクの台本によるミニ・オペラ『身体的変化』と『森』がウィーン祝祭週間で初演され、一躍注目を集める。2004年にノーベル文学賞を受けたこの同国人の作家とは、その後もたびたび共作している。1999年、ロンドン交響楽団の委嘱作『クリナメン/ノードゥス』がピエール・ブーレーズの指揮で

初演され国際的名声を獲得、以後現代音楽界の第一線で活動を続けている。

王道のキャリアとは裏腹に、その音楽は保守性とはほど遠い。デビュー直後からエレクトロニクスを駆使し、短編映画の音楽、サウンド・インスタレーションなど分野横断的作品を発表。音の作りにおいても領域の横断を試み、器楽音と電子音のいずれとも判別しがたい、「両性具有的」とみずから形容する音を多用した。また師ノーノに通じる闘士の姿勢を顕わにし、女性作曲家に対する不公平な待遇をインタビューで告発、2000年には極右のオーストリア自由党(FPÖ)の政権入りに抗議し、デモの先頭でマイクを握っている。しかし創作では、過度の政治性や真摯さに陥ることなく、文化に高低はないという立場から、映画や文学、他の音楽ジャンルを養分としながら、聴き手に衝撃を与える表現を追求。その極端な例が、稀代の前衛的パフォーマーの歌唱を演奏会用音楽として再現した、カウンターテナーと室内オーケストラのための『クラウス・ノミへのオマージュ』(1998、2010改訂)だろう。ヴァレーズを範と仰ぐノイヴィルトが伝統的編成から引きだす音響もまた、聴く人に驚きを与えずにはおかない。ウィーン・フィルが初演した『旅/針のない時計』(13、15改訂)に溢れる、トランペットの音をオーケストラに拡張したかのような、眩いばかりの響きがその好例だ。

デビュー以来、オペラないしミュージック・シアターは創作の大きな柱をなしており、キャリアの形成に貢献している。映像の編集におけるモーフィングに想を得て、カウンターテナーから狼の遠吠えへの推移を連続的に処理した『小羊の饗宴』(1993、97~98改訂)、デイヴィッド・リンチの同名の映画にもとづき、映像と音楽を巧みに同時進行させた『ロスト・ハイウェイ』(2002/03)はともにイエリネクとの共作である。ハーマン・メルヴィルの小説『白鯨』を題材として、作家自身を登場させるといったユニークな発想を盛り込んだ『追放された者』(08~10、12改訂)、ベルクの『ルル』を、1950年代のニューオーリンズに生きる黒人女性を主人公として再構成した『アメリカン・ルル』(06~11)も注目された。だが最大の話題作は、ウィーン国立歌劇場が上演した初の女性作曲家によるオペラ、ヴァージニア・ウルフの同名の小説にもとづく『オルランド』(17~19)であり、プロダクションも川久保玲ら女性を中心としたメンバーが担当した。2018年には、自身ユダヤ系でありながら、1924年の無声映画『ユダヤ人のいない都市』の音楽を作曲している。

2021年よりウィーン音楽大学教授。22年、エルンスト・フォン・シーメンス音楽財団賞を受賞。作品はリコルディとブージー&ホークスから出版されている。

[平野貴俊]

オルガ・ノイヴィルトについて

●細川俊夫 (国際作曲委嘱シリーズ監修)

近年、ヨーロッパの作曲界においても女性の作曲家たちの活躍が著しい。その頂点の一人であるカイヤ・サーリアホが、悲しいことにこの6月初めに亡くなってしまった。そして現在、そのもう一人の先頭に立つ作曲家がオルガ・ノイヴィルトだろう。カイヤがオーソドックスな現代音楽世界を代表し、美しい音響世界を生み出していく作曲家だったのに対して、オルガはこれまでになかった新しい世界をエキセントリックに表現する戦闘的な作曲家である。映画、文学、新しいメディア等の影響を強く受けながら、これまでになかった音楽世界を次々と生み出していく。その大胆で勇氣ある実現への力強い歩みに、多くの人は閉口しながらも、その説得力のある音響に圧倒されてしまう。

これまでにサントリーホールに招待されてきた作曲家達の多くが日本への憧れを語るときの関心事は、京都や禅、仏教といった古い日本の文化であった。オルガも10代の時から日本への憧れを持っていたというが、その関心は日本のポップカルチャーやアンダーグラウンドなカルチャーであった。彼女は10代の時に数ヶ月日本に滞在している。それからずいぶん時間が経った今、彼女は現在の東京でどんな発見をするだろうか。オルガのサントリーホールへの日本上陸が待ち遠しい。



© Harald Hoffmann

細川俊夫 × オルガ・ノイヴィルト

■細川俊夫

オルガへ。あなたはまだ10代の時に日本に長く滞在されたということですが、どのような経過で日本にいらしたのですか？そしてあなたは日本文化のどのような点に興味を持たれたのでしょうか。

■オルガ・ノイヴィルト

私は18歳のとき、5週間かけてひとりで日本を旅しました。そのころ私は日本映画、とりわけ黒澤明の映画のファンで、また地質学にひじょうに興味をもっていましたので、日本の自然の多様性とその独特の風景に惹かれ、さらには日本の演劇形式の抽象性に深く魅了されていました。

生活と芸術のあらゆるレベルにおよんでいる侘び寂びという美の概念は、私にとって、人間存在の本質であり続けています。ですが私が同じくすばらしいと思うのは「皮肉な発言」[反語表現、当てこすり、嫌味など]で、これは礼儀正しさの対極に位置する、しばしば冷酷で無慈悲なものです。日本のドラマ、アニメ、漫画といったポピュラーな文化のみならず、伝統的な日本の芸術にも表れていると思います。この高尚さと俗っぽさの共存に私はたいへん心惹かれるのです。

■細川俊夫

現在、ヨーロッパでは特に女性の作曲家が尊重され、ようやく女性にも作曲委嘱や発表の場所が多く与えられるようになりました。しかしあなたが作曲家として出発した当時は、まだまだ女性のアーティストとしての活躍の場は少なかったと思います。そういう状況の中で、あなたはヨーロッパ音楽界の世界を切り拓く仕事をなされてきたと思います。ウィーン国立歌劇場での女性作曲家への最初の委嘱作品もあなたに与えられました。現在ではそうした男性中心社会は少し変化したと思われませんか？

■オルガ・ノイヴィルト

私がデビューした1980年代末には、女性作曲家に与えられる機会がほとんどゼロだったというだけでなく、さらにひどいことに、女性作曲家は作曲家として真面目に扱われさえせず、女性は自分が何を表現したいか、いわゆるクラシック音楽界でどう曲を作ればいいのかをわかまえていると信じられていたのです。現在では信じがたい、とんでもない不快な話を挙げていけばきりがありません。今日では、世界中にすぐれた若い女性作曲家がたくさんいますが、残念なことに、私の世代が何に対して闘わねばならなかったかを知る人は多くありません。当時はまだインターネットがありませんでしたから。クラシック音楽界の大規模な組織からの委嘱という点で、信頼されその作品が演奏されるのは、いまだに多くが男性です。たしかに私は、ウィーン国立歌劇場の150年の歴史のなかで、初めて委嘱を受けた女性作曲家です——ちなみにそこでは、私の青春のヒーローのひとりである川久保玲が、すばらしい衣裳を作ってくれました——が、5回の上演のチケットが完売した『オルランド』は、にもかかわらず、歌劇場の伝統である再演がなされていません。観たい人、聴きたい人がたくさんいるのに、そういう状況なのです。再演されないのが、女性作曲家の作品はふたたびなかったことにされます。ただ、少なくとも喜ぶべきはこのプロダクションのDVDが製作されたことであり、それによって、この巨大な作品は完全な消滅から免れることになりました。このように女性作曲家が平等に可視化されるまでの道のりは、まだまだ遠いのです。それどころか、現在ではむしろすべてが後退してしまっているように思えます……

■細川俊夫

あなたは音楽ばかりでなく文学、映画等、さまざまなアートに深く関心を持ち、他の分野の優れた芸術家との深い交流の中から、ご自身の音楽を採求されてきました。特に作家のイエリネクとの共同作業によるオペラは

注目を集めました。日本でも人気のあるイエリネクとの交流について教えてください。

■オルガ・ノイヴィルト

私が生まれ育った環境は、あらゆる分野から現代オーストリアの芸術家が集う、たいへん芸術的なものでしたから、多様な芸術形式に子どものころから興味を抱くのは当然のことでした。私はまだひじょうに若いときに、多くのオーストリアの作家と知り合いました。そのひとりが、15歳のときに知り合ったエルフリーデ・イエリネクです。彼女の本を読んだ私は、芸術的、知的、感情的に、自分とひじょうに近いものがあることをすぐに感じました。しかしふたりの女性——イエリネクと私——は、1980年代末から2000年代初頭にかけて音楽祭や歌劇場で音楽面のトップを務めていた、たいへん父権主義的な人びとにとって、手に負えない存在でした。私たちの巨大なオペラ・プロジェクトは最初委嘱を受けたあと、5つのヨーロッパの歌劇場によって、次から次へと拒否されました。6年にわたって可能性がぼつぼつと生じた挙句、上演は許可されなかったのです。その後について語る必要はないでしょう。われわれは上演後20年以上も沈黙を強いられ、その間イエリネクはノーベル文学賞さえ受けたにもかかわらず、共働の試みをやめてしまったのです、これ以上屈辱を味わうことのないように[ただし、『小羊の饗宴』(1993、97~98改訂)、『ロスト・ハイウェイ』(2002/03)はともにイエリネクとの共作である]。私たちがやったようなコラボレーションをそのずっと後になって行った、ジョージ・ベンジャミンとマーティン・クリンプが同じ目に遭うなどと想像できるでしょうか？

■細川俊夫

今回、初演される作品は、ウィーン国立歌劇場で初演されたオペラ『オルランド』を声とオーケストラのために改作されたものですね。このオペラ

についてと今回の新作について教えてください。

■オルガ・ノイヴィルト

この回答の枠内で、ヴァージニア・ウルフにもとづく私の『オルランド』について詳細に語ることは不可能でしょう。このオペラは上演に2時間半を要します。新作は、アルバン・ベルクが『ルル』に対して行ったのにも似た、一種の組曲です。『オルランド』のいくつかの「状況」に焦点を当て、彼／彼女の流動的な状態、人間いかにあるべきかということについての強制と偏見に満ちた社会において、認められ自由を得るための闘いを扱ったものとなっています。

■細川俊夫

あなたはオーストリアという古いクラシック音楽の強い伝統の残る場所で生まれました。あなたにとってオーストリアの音楽伝統はどのようなものでしょうか？

■オルガ・ノイヴィルト

それについてはひじょうに多くのことが語られていますから、説明するのはむずかしいのですが、オーストリアで支配的な伝統、どんな片隅にも発見できるようなそうした伝統に押しつぶされないようにするのは至難です。何世紀にもわたってオーストリアの作曲家が発揮してきた途方もない創造性、発明の才はすばらしいものですが、彼らの大半が受けいれられ、許容されたのはやっとその死後になってからです。

■細川俊夫

あなたが選ばれた若い作曲家について教えてください。

■オルガ・ノイヴィルト

スウェーデンの若い作曲家、ヤコブ・ミュールラッドを知ったのは2018年、合唱曲『Nigun』を聴いたときで、これはユダヤの礼拝を、彼なりに抽象化してアプローチした作品です。彼の合唱の書法はとても興味深く、私はひじょうに心を動かされました。ヤコブがさまざまな音楽の領域で活動し、さまざまなジャンルの音楽家と共働しているのはたいへんよいことです。視野のとても広い若者というのはすばらしいものです。

■細川俊夫

今後、どのような作曲活動を展開されようと思っていますか？ 今後の予定を教えてください。

■オルガ・ノイヴィルト

2021年、デイヴィッド・リンチの映画の台本作家、バリー・ギフォードと何年にもわたって取り組んできたオペラがキャンセルとなったのですが、私はこの作品にとっても愛着を感じていて、心血を注いだにもかかわらず12年が無駄になってしまったので、作曲する意欲はゼロになってしまいました。現在私は、作曲というものの意義をふたたび信じ、ピエール・ブーレーズの生誕100周年を祝う短いオーケストラ作品を手がけています。秋には、すばらしいクラリネット奏者でもあるイェルク・ヴィトマンのためのクラリネット協奏曲に着手する予定です。彼とは何年ものあいだ、ともに作業する計画を立てていましたが、おそらく今がその時でしょう。そしてもし気力があり、意欲を奮い立たせることができれば——というのもオペラの作曲は、たいへんに辛い、膨大な時間を要する仕事なので——2つの新しいオペラを作ることができるかもしれません……

※[]は訳者による補足

[平野貴俊 訳]

ヤコブ・ミュールラッドからのメッセージ

こんにちは！ 私ヤコブ・ミュールラッドは、スウェーデンのストックホルム出身の作曲家です。私が深く尊敬するオルガ・ノイヴィルトと並んで、この立派なプログラムに名を連ねられることをたいへん光栄に思い、興奮しています。

私の作る音楽の根本に、人生というこの巨大なタペストリーに私たちが織りこんでいる人類共通の体験、そして音楽、楽音のコンセプトのもつ魅惑があることを、しばしば発見されることと思います。私の作品『REMS』で、そのような音の風景がひとつの形をとって現れました。

『REMS』は夢を見ている状態を探究した作品ですが、そこではたんにその本質がとらえられるのみならず、この状態が具現化されています。これは睡眠をめぐる作品というよりも、睡眠を利用した作品であり、私は潜在意識の音そして旋律をも写しとることで、睡眠中に私たちのなかで響き渡る、超現実的な音の風景を再現したのです。

打楽器によるグリッサンド(チューブラー・ベルを水に浸して、夢が引きおこす音のたゆたうような質感を模倣するなど)、さまざまな文化の子守歌の挿入といった多彩な技法を使い、形のないものに形を与えようと努めました。親密であると同時に拡がりをもった仕方で、夢を見るという人類に共通の体験を描こうとしたのです。

『REMS』を辿るこの旅は、聴く人をいつでも歓迎します。私と一緒に、夢の妙なる風景を眺めて回りましょう。

『REMS』をともに体験することで、私たちは意識の境界を探究し、目ざめている状態と夢を見ている状態、意識と潜在意識、触知できるものと触れえないものの間の架け橋をつくることができるでしょう。

[ヤコブ・ミュールラッド／平野貴俊 訳]

テーマ作曲家

オルガ・ノイヴィルト

サントリーホール国際作曲委嘱シリーズNo. 45 (監修：細川俊夫)

Theme Composer OLGA NEUWIRTH

Suntory Hall International Program for Music Composition No. 45 (Artistic Director: Toshio Hosokawa)

8.23 (水) 19:00 ブルーローズ

Wednesday, August 23 at 19:00 / Blue Rose

作曲ワークショップ×トークセッション

Music Composition Workshop × Talk Session

[第一部] オルガ・ノイヴィルト×細川俊夫 トークセッション

Part 1 Olga Neuwirth × Toshio Hosokawa Talk Session

[第二部] 若手作曲家からの公募作品クリニック／実演付き

Part 2 Workshop by Call for Scores

レクチャー：オルガ・ノイヴィルト／細川俊夫

Olga Neuwirth / Toshio Hosokawa, Lecture

内垣亜優

Ayu Uchigaki

● 『チェロ・チュロス・チョリソ』 [約4分30秒]

ソロ・チェロのための (2023)

Cello-Churro-Chorizo for Cello Solo

室元拓人

Takuto Muromoto

● 『トカラ・イヴオーク』 [約10分]

フルート、ヴィオラ、チェロのための (2020)

Tokara Evoke for Flute, Viola and Cello

山田奈直

Nanao Yamada

● 『鯨』 [約8分]

ソロ・クラリネットのための (2023)

Whale for Clarinet Solo

*受講順は当日発表

The order of participation will be announced on the day

演奏 フルート：齋藤志野 Shino Saito, Flute クラリネット：田中香織 Kaori Tanaka, Clarinet ヴィオラ：甲斐史子 Fumiko Kai, Viola チェロ：下島万乃 Mano Shimojima, Cello

通訳 蔵原順子 Kazuko Kurahara, Interpreter

● 内垣亜優 (2001～)

『チェロ・チェロス・チョリソ』 ソロ・チェロのための (2023)

■プロフィール

愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻作曲コース4年在学中。令和4年度愛知県立芸術大学優秀学生賞受賞。第8回日本国際合唱作曲コンクール第3位。これまでに作曲を成木理香、小井洋明に師事。

プログラム・ノート

作曲し始める時に、楽器の名前から何かヒントを得ようと思い、「チェロ、チェ…チュ…チェロス、チョ…チョリソ…」と発音から単語を連想していきました。そこではじめに思いついた「チェロス」と「チョリソ」の2つを「チェロ」と続けて発音した時のリズムカルな語感が面白いと感じ、そのリズムやイントネーションなどからインスピレーションを得て作曲しました。

● 室元拓人 (1997～)

『トカラ・イヴォーク』 フルート、ヴィオラ、チェロのための (2020)

■プロフィール

東京藝術大学音楽学部作曲科を経て、同大学院修士課程作曲専攻修了。第37回現音作曲新人賞入選、第90回日本音楽コンクール第3位、第11回JFC作曲賞入選、22年度武満徹作曲賞第1位。作曲を鈴木純明に師事。

プログラム・ノート

人はどこからやって来て、どこに行くのか。我々はその究極的な問いに対峙したとき、「あの世」にあこがれ、畏敬の念を抱く。

人が生きているうちには行くことのできない永遠の場所「あの世」に住み、そこから時を定めてやってくる神がいる。これを「まれびと」と呼ぶ。

本作は、鹿児島県のトカラ列島に伝わるまれびと「ボゼ」から着想を得た。息音や擦弦による霞の世界は、普段は見ることのできない「あの世」。そこから神が姿かたちを表すように、次第に楽音のフォルムが浮かびあがる。最後は、再び泡の如く浮遊しながら、魂を「あの世」へ送り届ける。

● 山田奈直 (1997～)

『鯨』 ソロ・クラリネットのための (2023)

■プロフィール

国立音楽大学作曲専修、および大学院修士課程作曲専攻を首席卒業。音楽以外の何かから得た発想をもとに、全体音響にこだわった作品を創作している。作曲を川島素晴、渡辺俊哉に師事。現在は国立音楽大学博士後期課程在籍。

プログラム・ノート

深海を遊泳する鯨の様子から発想を得た作品です。鯨は、仲間とのコミュニケーションにおいて使用する「鯨の歌」や、遊泳時に自身の位置を把握するために使用する「エコーロケーション」というクリック音、狩猟の際に合図として使用する「フィーディングコール」など、生きるためにたくさんの音を発します。それらの録音物も意識しつつ、鯨という生き物のもつ巨大で静謐なイメージや、深海を孤独に彷徨う鯨の感情を表現することを試みました。



フルート: 齋藤志野

Shino Saito, Flute

東京藝術大学大学院を卒業後、瀬木芸術財団奨学生に選ばれ、2017年より渡欧。カール=ハインツ=シュッツのもとでソロ・フルートを、グラーツ国立音楽大学にてクラフグフォルム・ウィーンのフルート奏者、エヴァ・フラウ、ヴェラ・フィッシャーのもとで現代音楽を学び、共に最優秀の成績で卒業した。クラフグフォルム・ウィーン、Ensemble Zeitfluss、Synchronos Ensembleなどの現代曲アンサンブルのグループに客演し、現在はアンサンブル・トーンシークメンバーとして活動している。

Twitter: @piyoshike_fl

Facebook: @shino.saito.984



クラリネット: 田中香織

Kaori Tanaka, Clarinet

国立音楽大学、バーゼル音楽院音楽大学を卒業。第78回日本音楽コンクール第1位、第2回ジャック・ランズロ国際クラリネットコンクール第2位、第3回トリノ国際音楽コンクール第2位、第3回カール・ニールセン国際音楽コンクール特別審査員賞受賞。ソリストとしてバーゼル響、バーゼル室内管、オーデンセ響、東響、東京フィル、九響などと共演。スウェーデン室内管弦楽団契約首席奏者(2013/14)。元バーゼル音楽院音楽大学講師。10年にわたるヨーロッパでの活動を経て14年秋に帰国、現在ソロ・室内楽・現代音楽の分野で活動中。国立音楽大学講師。

Twitter: @Kaorinette_Kla



ヴィオラ: 甲斐史子

Fumiko Kai, Viola

桐朋学園音楽大学卒業、同大学研究科修了。現代音楽演奏コンクール(競楽V)第1位入賞。第12回朝日現代音楽賞受賞。2003年度青山パロックザール賞受賞。ドイツ・ダルムシュタットにて、クライニヒシュタイナー賞受賞。アンサンブル・ノマド・メンバーとして、第2回佐治敬三賞受賞。国内外の音楽祭に出演、数々の初演、録音を行っている。ジパングレーベルより3枚のCDをリリース。コジマ録音よりリリースの『アイヴス: ヴァイオリンとピアノのための4つのソナタ』が第75回文化庁芸術祭レコード部門優秀賞受賞。神奈川県立相模原栄栄高等学校、東京藝術大学(ソルフェージュ科)非常勤講師。



チェロ: 下島万乃

Mano Shimojima, Cello

名古屋市生まれ。3歳よりチェロを始める。第22回日本クラシック音楽コンクール弦楽器中学生部門第1位(グランプリ)、第75回全日本学生音楽コンクール東京大会チェロ部門大学の部第1位。これまで故 星野明道、林俊昭、山崎伸子、中木健二、花崎薫に師事。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、東京藝術大学を卒業、同大学院修士課程修了。アンサンブル・トーンシークメンバー。新作初演に多数携わり、レコーディングや即興演奏も行うなど、時代とジャンルに囚われず活動している。

Instagram, Twitter: @shimojimano

テーマ作曲家

オルガ・ノイヴィルト

サントリーホール国際作曲委嘱シリーズNo. 45 (監修：細川俊夫)

Theme Composer OLGA NEUWIRTH

Suntory Hall International Program for Music Composition No. 45 (Artistic Director: Toshio Hosokawa)

8.24 (木) 19:00 大ホール

Thursday, August 24 at 19:00 / Main Hall

オーケストラ・ポートレート

(委嘱新作初演演奏会)

Orchestra Portrait (Commissioned Work Program)

ヤコブ・ミュールラッド ● 『REMS』(短縮版) オーケストラのための (2021/23) [世界初演]

Jacob Mühlrad
(1991-)

REMS (short version) for Orchestra [World Premiere]

オルガ・ノイヴィルト ● 『オルランド・ワールド』 (2023) [世界初演 サントリーホール委嘱]

Olga Neuwirth
(1968-)

Orlando's World [World Premiere, commissioned by Suntory Hall]

メゾ・ソプラノ: ヴィルピ・ライサネン
Virpi Räsänen, Mezzo-Soprano

————— 休憩 intermission —————

オルガ・ノイヴィルト ● 『旅／針のない時計』 オーケストラのための (2013) [日本初演]

Olga Neuwirth

Masaot / Clocks without Hands for Orchestra [Japanese Premiere]

アレクサンドル・スクリャービン ● 交響曲第4番 作品54「法悦の詩」 (1905~08)

Alexander Scriabin
(1872-1915)

Symphony No. 4, Op. 54, "Le poème de l'extase"

指揮: マティアス・ピンチャー
Matthias Pintscher, Conductor管弦楽: 東京交響楽団
Tokyo Symphony Orchestra

プログラム・ノート

● ヤコブ・ミュールラッド (1991~)

『REMS』(短縮版)

オーケストラのための (2021/23)

スウェーデン出身のヤコブ・ミュールラッド(1991~)は、デビューからわずか10年後にドイツ・グラモフォンから作品集がリリースされるなど、近年著しい活躍をみせている。同国では珍しいユダヤ教徒であり、また幼少期から読字障害(ディスレクシア)に悩まされた彼は、音楽祭やコンクールといったアカデミックな舞台には立たず、北欧・バルト3国で盛んな合唱音楽で頭角を現した。その荘重で内省的な音楽は、「ホーリー・ミニマリズム」とかつて商業的に括られたペルト、タヴナー、グレッツキを嚆矢とする、1970年代以降の宗教的音楽と相通ずるものがある。

2021年に初演された、ストックホルム・コンサートホールとロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団の共同委嘱作『REMS』で、ミュールラッドは初めてフル・オーケストラに対峙した。タイトルは、人間が夢を見る睡眠の状態である「レム睡眠(rapid eye movement sleep)」を意味する。ここでミュールラッドは、夢と睡眠のもつ「謎めいた、心震わせるような側面」を探究すべく、自身の見る夢と睡眠を音に置き換え、さまざまな文化の子守歌、インドの夜のラーガなどを参照、約26分におよぶ音のタペストリーを織りあげた。

今回初演される短縮版は、原曲のほぼ4分の1に相当する約7分の長さをもつ。音楽的には、楽章などによる区切りをもたない原曲の、冒頭から約4分の1までをほぼそのまま切り取ったものである。これに続く、旋律が前面に押し込まれた表出力の強い箇所はカットされているが、結びは原曲と同様である。冒頭、静的で線的なテクスチャが瞑想的な雰囲気醸成を醸しだし、弦楽器と管楽器が、狭い音程内でのポルタメントを繰り返す。やがて弦楽器が2群に分かれ、短いグリッサンドを急速に反復し、その後管楽器も同じ動きを行い

強奏へと至る。最後は背景として、クロタル、タイ・ゴング、水に浸された1本のチューブラー・ベルが、ガムランのゴングさながら周期的に鳴り響く。

[平野貴俊]

Fl / Picc / A-Fl / 2 Ob / E-Hrn / Es-Cl / 2 Cl / 2 Fg / C-Fg - 4 Hrn / 3 Trp / 2 Trb / Bs-Trb / Tub - Timp - 4 Perc (Tam-Tam / 2 Bass Drums / 2 Tom-Toms / Tri / Vib / 2 Crotales / Chinese Gong / Tubular Bells / Waterphone / Mar / Thai Gongs) - Strings (min. 12-10-8-8-5)

※ミュールラッドからのメッセージを50頁に掲載しています。

●オルガ・ノイヴィルト (1968~)

『オルランド・ワールド』 (2023)

ウィーン国立歌劇場はイオアン・ホレンダーの長く保守的な総監督時代を引き継いだドミニク・マイヤー時代に、トーマス・アデス (1971~) やペーテル・エトヴェシュ (1944~) の新作を含む現代作品上演や現代的な演出を擁した一大改革を敢行し、保守的な音楽の街ではそれがなにかと物議を醸した。それは現在のボグダン・ロシュチッチ時代にも受け継がれていっそうエスカレートしているが、マイヤー時代のもっとも大きな成果が、この劇場150年の歴史上初めて女性作曲家に新作を委嘱して2019年に世界初演したことだろう。それがノイヴィルトの『オルランド』であった。

『灯台へ』や『波』と並ぶ、イギリス・モダニズムの代表的な女性作家ヴァージニア・ウルフの名作のひとつを原作 (邦題は『オーランドー ある伝記』と表記されてきた) とするこのオペラは、コム・デ・ギャルソンの川久保玲による衣装をはじめ、演出をポーリー・グレアム (当初の予定はカロリーネ・グルーバー) が担当、台本作成はフランス系アメリカ人の劇作家キャサリン・フィルーと作曲者本人のコラボというように、制作陣の多くを女性が占めたことでも話題を呼んだ。

原作はすでにそのはるか以前、1992年にサリー・ポッター監督、ティルダ・スウィントン (『ナルニア国物語』で白い魔女を演じた) 主演で映画化されており、その両性具有的な主人公の存在が現在

の性多様性につながる意味で大きな可能性を秘めた物語として着目はされていた。ジェンダー／セクシュアリティに発する多元的な問題に常に眼を向けてきたノイヴィルトが題材とするに、これほど相応しい原作はなかっただろう。

原作『オーランドー』は、両性具有を女性の視点から描いた作品として当初から注目されたが、近年ジェンダー／クイア (包括的な性的マイノリティ) 研究でますますその度合いが高まっている作品である。16世紀末に生まれた青年貴族オルランドが、容姿ゆえにエリザベス女王の寵愛を受け、失恋を経たのちに詩集『樫の木』を完成させ、また2回の昏睡を経験したあとに目覚めると女性になって詩作を続けるという話。女性ゆえに世間には認められない詩作を介し、またヴィクトリア期の子供虐待の歴史などを目の当たりにしつつ、彼女は男性が作り記録していく歴史に疑問を感じながら20世紀まで生き、女性としての生涯を悦びのうちに続けていく。

原作は1598年に始まり、初版出版日の1928年10月11日 (木) 深夜の日付で終わっているが、オペラ台本はそのあと、ユダヤ人迫害 (これはユダヤ系のノイヴィルトにとっても切実な問題) を含むナチ時代と原爆を伴う終戦、戦後の喧噪からオペラ初演日の2019年12月8日まで続く (公演のたびにこの日付は延長された)。戦後、詩人のオルランドは現代の詩人とも言うべきロック歌手になり、また彼／彼女の子としてトランスジェンダーの歌手ジャスティン・ヴィヴィアン・ボンドが実名で登場して「ノンバイナリー」 (男女どちらの性別をも意識しないセクシュアル・アイデンティティの保有者) の解放を訴えるなど、現在から未来にかけてのジェンダー／セクシュアリティ解放のメッセージが強くなって、クイアな存在のルーツとしてのオルランドの意味が強調されていく。また最終的に児童合唱を交えて声高に、同時に繊細に自由な未来への希望が歌われていく。

今回初演される組曲版は、全19景からなるオペラのなかから、ことにその前半を中心にしてオルランドの歌唱部分とその前後のオーケストラ部分をつなぎ合わせて構成されている。恋人サーシャ

やシェルマーダイン、オランダに批判的な作家で、彼／彼女同様にやはり300年以上生き続けている「怪人」ニコラス・グリーン、あるいはエリザベス女王といった重唱相手の歌唱パートがすべて削除されているため(合唱のことはほんの一部や児童合唱の歌う「希望」という歌詞、そしてボンドの歌の一部がオランダによって歌われている)、歌詞は一方通行的で断片的な印象を受けるが、それは『ヴォツェック』や『ルル』の組曲でも同様ではあろう。むしろ、ノイヴィルトの創り上げる、エンターテインメント性をも十分に盛り込んだ万華鏡のようなカコフォニック(ノイズ的)な音響世界と、その根となっている物語世界でのオランダの多様性、そして未来へ託された希望を聴き取ること、ここではそれが肝要だろう。

使用楽器のなかでは一部の調律が変えられている(ハーブシコードは443ヘルツのオーケストラより低い425ヘルツに調律、逆にエレキギターは高く、約454ヘルツに調律、ピアノはプリペアされる)。第二次世界大戦後の場面でドラムキットとエレキギターが加わって音楽は進む。エリザベス朝時代のリュート音楽やマドリガルからオフエンバックの『地獄のオルフェ』まで、さらにはクイーンやレディー・ガガ、ファイヴ・ステアステップスなどからの引用もさまざまな箇所に見られては消える。まさに、現代オーストリアでいちばん尖った作風で、かつクラウス・ノミのようなポップな音楽へのアンテナも多次元に張り巡らせて、加えてきわめて知的でもあるというノイヴィルトの面目躍如たる作品になっている。

[長木誠司]

M-S - 2 Fl (Picc / Lotus Fl) / 2 Ob / Es-Cl / Cl / Bs-Cl / A-Sax / 2 Fg (C-Fg) - 3 Hrn / 3 Trp (Picc-Trp) / 2 Trb / Tub - 3 Perc (I=Vib / 3 Thai Gongs / 7 Crotales / 3 Cowbells / Tam-Tam / Suspended Cym / Timp / Snare Drum / Tom-Tom / Wood Block / Tri / Thunder Sheet / Metal Block / Anvil / 2 Auto-Brake Drums / 2 Mechanical Car Horn / Sleigh Bells / Guiro / Chinese Opera Gong / Ratchet II=Tubular Bells / 4 Thai Gongs / 6 Crotales / 5 Cowbells / Tam-Tam / Tri / Suspended Cym / Bass Drum / Tom-Tom / 2 Temple Blocks / Metal Block / 2 Auto-Brake Drums / Guiro / Sand Blocks / Mechanical Car Horn / Anvil / Reception Bell / Rolmo Cym / Metal Plates III=Glock / 3 Thai Gongs / Tam-Tam / 7 Crotales / Timp / Tom-Tom / Snare Drum / Suspended Cym / 5 Cowbells / Tri / Wood Block / Metal Block / 2 Auto-Brake Drums / Anvil / Thunder Sheet / 2 Mechanical Car Horns / Sleigh Bells / Guiro / Chinese Opera Gong) - Electric Guit - Prepared Pf - Harpsichord - Strings (12-12-8-6-4)

※歌詞対訳:64~67頁をご覧ください。

●オルガ・ノイヴィルト (1968~)

『旅／針のない時計』

オーケストラのための (2013)

流れゆく時のなかで揺れ動く事物について

「ヴルタヴァ河とドーナウ河の間
そして私の幼少期を過ごした河の間で、
すべてのものが私についての概念を持っている。」
インゲボルク・パッハマン、プラハ、1964年1月*1

2010年、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団から、グスタフ・マーラーの没後100周年記念のための管弦楽曲の作曲を依頼された。私は2011年末までにふたつのオペラを仕上げなければならなかったの、辞退せざるを得なかった。

委嘱が2015年まで延期されたとき、私は、2010年からマーラーを振り返るという考えを捨てたくないと思いついた。その間、私は自分のオーケストラ作品にとって「音楽的な乱気流」の引き金を引くような夢を見たのだった。

私は祖父には会ったことがなく、写真と祖母の話を通してしか知らないのだが、その祖父が夢のなかに現れた。さざ波の寄せるドーナウの河畔、日の差し込む草むらで、葦の絡まる帯となりながら無数の緑の葉が風になびいていた。祖父はその草むらの中央に立ち、カタカタと音のする古いテープレコーダーに乗せて次々と歌を歌ってくれた。彼は言った、「はじめからわしは驚くほどの変わり者じゃった。はずれ者で、オーストリアの環境に溶け込んでしまうことなどできなかったのじゃ。生まれてこのかた、ずっと疎外感を感じておった。これらの歌を聴いてみい——これこそわしの物語じゃよ」。彼は時間から落ちこぼれ、私もその体験を共有した。

私はこの夢にたく感動し、それを作品創作を通して焼き付けておこうと考えた。というのも、私にとって書くことは常に記憶と関係しているからだ。それを聴くひとが、あたかも自分が夢

見たものを聴いているかのようなものに仕上げる。聴いている間、聴き手自身が夢を見ているような気分させること。

『旅 *2/針のない時計』は、記憶がどのように薄れていくのかということについての詩的な考察と見なすことができる。この作品では、私の祖父が人生の途上で過ごしたまったく異なる場所や経験から得た旋律の断片がいくたびも組み合わせられる。それは「形ある流れとなった記憶」である。曲はひとつの「グリッド」を構成し、そのなかでは歌の断片が何度も鳴り響き、つなぎ合わされる。同時に、メトロノームのようなビートに基づいた「音楽的オブジェ」があり、それが時間を聞こえるもの、知覚できるものにする。このメトロノームのようなビートは回転木馬のように現れては消える。けれども回転木馬とは異なり、それらは同じままではなく、コンテキストのわずかなずれとさまざまなテンポの重ね合わせのなかで毎回変化する。この「メトロノームの刻み」によって、すなわち外側から制御された時間の脈動によって、時間そのものが無意識という、主観的に時間のない領域となる。最終的に時間は溶解するように見える、すなわち針のない時計となるのだ。

私の祖父は激動の歴史を有する海沿いの街で生まれた——この街はヴェネツィアの支配下にあったこともあれば、ハンガリー＝クロアチア同君連合の支配下にあったこともある。その後、彼はクロアチアとハンガリーの国境にあるドーナウ河流域で育った。だから、祖父もドーナウ河畔での子供時代について書いたカネッティと同じく、次のように感じていたのかもしれない。「子供のころ、私はその多様性を洞察することができなかったが、それによるさまざまな影響は絶えず感じとることができた」*3。そして「…私という人間は、自分ではけっして意識していないような多くの人間たちからできあがっている。」*4 このように、この作品は私にとって、河によって聞かれ海へと運ばれるさまざまな（音楽的）物語についてのものなのだった。その河こそ、私に

とってドーナウなのだ。

マーラーの話に戻ろう。世界初演後、彼の交響曲第1番は“Katzenmusik”（盛りの付いた猫の鳴き声音楽、ノイジーな音楽）と呼ばれ、折衷主義だと批判された。しかし、それこそ私が興味を持った点だ！私はこの音楽的な現象、そして「寓話的な時代からの古代の香り」、具体的にはドーナウ河畔での祖父の幼年期と思春期を探求したかった。ローベルト・ムージルがその小説『特性のない男』のなかで「カカニア」と呼んだオーストリア＝ハンガリー帝国時代の伝統的世界を、私の現在の生活の地平から振り返って見たかったのだ。アイデンティティとルーツを求めるために。おそらくこの作品は、何でも好きなように作曲できる「否定的な意味での自由」を感じ、それゆえムージルの言う「特性のない人間」に近いものを感じているオーストリアの一作曲家の、皮肉でメランコリックな「白鳥の歌」なのである。

『旅／針のない時計』は、断片化された私の出自に由来する多声的な響きと、途切れることのない流れを求める私の願望からできあがった。この流れは作品全体を通して絶え間なく入れ替わる細胞によって作られている。

私にとって“Heimat”（故郷、祖国）とは漠然としたものだ。『旅／針のない時計』では、「いくつかの祖国」を持っている人間という考え方への応答を試みている。すなわち、自分の音楽であると同時にそうではない音楽を通して。それは馴染みのある響きと馴染みのない響き、あらゆるカカニア的なノスタルジーを超えた先にあるものであり、それを作曲によって時間を止めるという不可能な試みのなかで捉えるのだ。

[オルガ・ノイヴィルト／長木誠司 訳]

注)

- *1 イングボルク・バッハマン「ブラハ 64年1月」(『インゲボルク・バッハマン全詩集』中村朝子訳、青土社、2011年、332頁)
- *2 タイトルの「旅」の原語はヘブライ語の“Masaot”である
- *3 エリアス・カネッティ『救われた舌』(岩田行一訳、法政大学出版局、1981年、5頁)
- *4 同上、138頁

3 Fl (Picc) / 3 Ob / 3 Cl (Es-Cl / Bs-Cl) / 2 Fg / C-Fg - 3 Hrn / 3 Trp (Picc-Trp) / 2 T-Trb / Bs-Trb / Tub - Cel - 3 Perc (I=Vib / Tubular Bells / 2 Gongs / 5 Crotales / Tom-Tom / Cym / 2 Cowbells / Wood Block / Ratchet / Metronome II=Guero / Inkin / Glock / Crotales / Snare Drum / Bass Drum / Tri / Cym / Tom-Tom / 2 Cowbells / Small Bells / Metronome III=Japanese Temple Bell Daitokuji / Gong / Tam-Tam / 4 Crotales / Tom-Tom / Cym / 2 Cowbells / Tri / Wood Block / Ratchet / Metronome) - Strings (16-14-12-10-6)

初演 2015年5月6日 ケルン・フィルハーモニー
 ダニエル・ハーディング(指揮)、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
 献呈 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

●アレクサンドル・スクリャービン (1872~1915)

交響曲第4番 作品54「法悦の詩」(1905~08)

帝政ロシア末期のピアニスト兼作曲家アレクサンドル・スクリャービン(1872~1915)が「法悦の詩」の創作に取り組んだのは、1905~08年のこと。これは、彼が祖国を離れて西欧諸国を歴訪しながら、リストとワーグナー、また西欧の哲学・神智学を探究し、音楽書法の新機軸を生み出そうと試行錯誤していた時期にあたる。彼は最晩年、ほとんど「無調的」とまで言われるようになる独特の和声語法にたどり着き、ロシアのモダニズム音楽の時代の寵児となるが、本作はその出発点の一つとなっている。

興味深いことに、スクリャービンは楽曲の発表より一年先立って、同じく『法悦の詩』と題された詩作品を出版している。「魂が／生の渴望に励まされ／否定の高みへの／飛行へと誘われる」……と始まる369行にもわたる長大な自由詩は、最終的には音楽と全く別個の作品として切り離されたという。しかしそれでも、スクリャービンが当初、詩と音楽を新しい形で関連付けようと意図していたことは明らかだろう。実際、詩の筋書き——主人公の「魂」が自由に「遊び、愛撫し、喜び」、最終的に自身の芸術の栄光を誇り称える——と音楽の道筋を比べてみると、何らかの

かたちで詩と音楽が対応しているものとして聴くことができるように思われる。

「法悦の詩」の単一楽章の音楽は、自由に変形させたソナタ形式による。楽曲の前半に提示されるいくつかの主要動機は、詩と音楽の内容にかんがみて、例えば3連符の跳躍による「意志」、震えるような装飾音を交えた軽やかな「飛翔」、ファンファーレの「自己肯定」などと名付けられている。それらが絡み合いながら成り立つ構造は一見複雑に思われるが、動機それぞれは簡潔ながら个性的で、楽曲の進行の中で発展過程を追うことができる。動機の変奏・展開とともに音楽のスケールは次第に増していき、鐘の音すら伴うハ長調の高らかなファンファーレと、その後の主和音の激烈な強奏により、楽曲は盛大に喜ばしく締めくくられる。

[山本明尚]

3 Fl / Picc / 3 Ob / E-Hrn / 3 Cl / Bs-Cl / 3 Fg / C-Fg - 8 Hrn / 5 Trp / 3 Trb / Tub - Timp - Bass Drum / Cym / Tam-Tam / Tri / Glock / Bells - Cel - Org (or Harmonium) - 2 Hrp - Strings

初演 1908年12月10日 ニューヨーク、カーネギーホール
 モデスト・アルトゥラー(指揮)、ロシア交響楽協会

Orlando's World

Orlando:

I am alone
 For looks and sighs true love can best express.
 And he whose words his passions right can tell.
 Doth move in words than in true love excel.
 Oh, why is reality so multiple and complex?
 An old body that smells like fur kept in camphor.
 The night,
 The candles, bright.
 The silent silent glen,
 The clanging of serving men.
 The poor thing, ... her skin scarred by smallpox, half bald.
 Elizabeth, the great patron of great poets.
 Will she read my poems?
 My knee
 For the old woman loves me.
 Sasha! My pet.
 Convention means nothing to me.
 Snow melt!
 Melt me
 You
 Melt me
 "Jour de ma vie."
 You are my first love.
 I love you!
 Sasha, I'll ruin my career for a Cossack woman and a waste of snow –
 My jewel, my own, Sasha, my fox, my pet.
 The sun, blood red, sinking...
 Sasha?
 Jour de ma vie!
 The clock.
 Two... Three... Six? Seven...

『オルランド・ワールド』

オルランド:

ほくは独りだ
 容貌や溜息よりも本当の愛が一番の表現だ。
 自分の情熱を正確に語りうることばを持つ男。
 彼は愛に秀でるよりまさにことばの世界に入り込む。
 ああ、なにゆえ現実はいかにも多様にして複雑なのか?
 樟脳の染みついた毛皮のような匂いのする老人の身体。
 夜、
 ろうそく、明るい。
 静まりかえった谷間、
 召使いたちの喧噪。
 哀れにも、…女王様の肌は疱疹痕が残り、頭は禿げかけている。
 エリザベス、偉大なる詩人たちの偉大なる保護者よ。
 ほくの詩を読んでいただけますか?
 跪きます
 この老女はほくを愛しているのだから。
 サーシャ! ほくのかわいいひと。
 慣習などほくにとっては無意味だ。
 雪が融かす!
 ほくを融かして
 きみが
 ほくを融かす
 「ほくの生涯最良の日」
 きみはほくの初めての恋人。
 愛してる!
 サーシャ、ほくはコサック女と不毛な雪と引き替えにキャリアを棒に振ろう—
 ほくの宝石、ほくだけの、サーシャ、ほくのあやかし、かわいいひと。
 太陽が、血のように赤く染まって、沈んでいく…
 サーシャ?
 人生最良の日だと!
 時計だ。
 2...3...6? 7...

Sasha
 Faithless, mutable, fickle, devil, adultress, deceiver.
 I need company.
 I invite you to speak about the sacred subject of poetry
 Shakespeare? More venison? Wild fowl? Wine?
 I, myself, have been so rash to write... poetry...
 Would you give me your opinion on my poetry?
 I am done with men
 Done with men.
 I have asked the King to make me an ambassador
 to the land farthest away.
 To beat, to kill, to defame, to kill, to kill, to beat, to kill, to stab, to stab, to stab, to beat, to kill
 Bodies fall, pools of blood rise around them.
 Bodies
 Blood everywhere

Am I a woman?
 There is no doubt.
 For there is no doubt, a woman.
 Finally I'm alone.
 I am alone.
 I've sought happiness through many ages and not found it;
 fame and missed it;
 love and not known it...
 My hands shall wear no wedding ring. Ah.
 Am I dead?
 Do not leave me
 I will offer you pearls of rainy words.
 Let's find a place for us!
 Do not leave me!
 I lived for five hundred years and... hardly aged a day. five hundred years
 I can't keep quiet, but I love trees, dogs and the night, but people?
 Hope.
 And it is the 8th of December two thousand and nineteen!
 I finally started to live and write as I like, but: my hopes are fading, but my rage remains!

サーシャ
 不実で、移り気で、気紛れで、悪魔、浮気者、詐欺師。
 ぼくには仲間が必要だ。
 あなた[グリーン]をお招きしたのは詩という神聖な主題をめぐって語り合うため
 シェイクスピア? 鹿肉をもっといかが? 鶏肉は? ワインは?
 私自身、無謀にも書いておりまして…詩をなのですが…
 私の詩になにかご意見いただけませんか?
 男どもにはうんざりだ
 うんざりなんだ。
 国王陛下にはぼくを大使に任命して
 限りなく遠い国に派遣してくれるように頼んである。
 殴り、殺し、中傷し、殺し、殺し、殴り、殺し、刺し、刺し、刺し、殴り、殺し
 亡骸が倒れ、その周囲に血の海が広がる。
 亡骸が
 どこもかしこも血まみれだ

わたしは女なの?
 疑いの余地はない。
 疑いの余地はないからだ、ひとりの女。
 とうとうわたしは独りだ。
 わたしは独りだ。
 幸福を求めて多くの時代を過ごしたけれど見つからなかった—
 名声を求めたけれど得られなかった—
 愛を求めたけれど知ることがなかった…
 この手には結婚指輪を嵌めぬままにしましょう。ああ。
 わたしは死んでしまったの?
 わたしを置いていかないで
 たくさんの真珠のような雨降りのことばをあげるから。
 ふたりの場所を見つけましょう!
 わたしを置いていかないで!
 わたしは500年も生きているのに…一日分も年を取っていない。500年も
 わたしは黙ってはいられない、でもわたしは木々を、犬たちを、夜を愛す。でも人間は?
 希望。
 そして今日は2019年12月8日!
 わたしはようやく思いのままに生きて書くようになった、しかし—わたしの希望は消えゆくこと、
 でもわたしの怒りは消えはしない!



©Morgan Norman

ヤコブ・ミュールラッド Jacob Mühlrad (1991-)

ストックホルム出身。15歳のとき、父が修理した古いシンセサイザーを手にして音楽に開眼。ピアノをスタッフアン・シェイヤに学ぶが、読字障害(ディスレクシア)のために音楽理論と作曲の学習は遅れた。スヴェン＝ダーヴィド・サンドストレムに個人的に師事したあと、ゴットランド作曲学校およびストックホルム王立音楽院を卒業、英国王立音楽院にも短期留学した。これまでに発表した約25の作品の多くは、幼少期から熱心に信仰してきたユダヤ教を着想の源とする。2作目である『Anim Zemiro』(2012)、スウェーデン放送合唱団が初演した『Nigun』(14)などの合唱曲が評価され、キャリアを築く。21年にはドイツ・グラモフォンから、スウェーデン放送合唱団が録音した合唱作品集『TIME』が発売され、一挙に名声を高めた。信仰表明のごとく真摯な表情をたたえるその音楽では、巧みな明暗の設計が深遠な抒情を醸しだしている。彼が尊敬する、やはりユダヤ系のノイヴィルトと同じく、領域横断にも積極的に取り組む。これまでにラッパーやハウス・ミュージックのグループ、各種企業とのコラボレーションを行い、22年には映画『Burn All My Letters』(監督ビヨルン・ルング)のための音楽を作曲した。 [平野貴俊]

アレクサンドル・スクリャービン Alexander Scriabin (1872-1915)



モスクワの貴族の家庭に生まれる。モスクワ音楽院に学び、卒業後はピアニスト兼作曲家としてロシア・西欧で活動した。彼の作風は概ね3つの時期に分けられる。1900年頃までは前期と呼ばれ、ショパンを模範としてサロン風の軽妙な小曲集と重厚な大規模ピアノ作品に傾注した時期。08年ごろまでは中期とされ、ロシアと西欧を行き来しながらリストやワーグナーを音楽語法の手本とすると同時に、ニーチェ、ショーペンハウアーなどの読書体験や神智学への興味から、独自の宗教的哲学観を生み出した。後期となる10年以降はモスクワに住居を定め、同時代的思潮に共感を持つ詩人・画家・音楽家たちを招いて交流と思索を深め、同時にその音楽語法も理知的かつ斬新なものへと研磨させていった。超大作の総合芸術作品『神秘劇』の構想のさなか、15年に43歳で急死。その突然の死と作品の美しくも特異な響きは、17年の十月革命をまたいで同時代人、後の世代の音楽家に深く作用した。創作のなかで大部分を占めるのは10曲のソナタをはじめとするピアノ作品だが、大規模な管弦楽曲もよく知られており、特に『法悦の詩』(05~08)と『プロメテウス：火の詩』(08~10)では、彼の中・後期の作風の魅力がいかに発揮されている。 [山本明尚]

オルガ・ノイヴィルト Olga Neuwirth (1968-)

→42~43頁参照



© Jukka Lehtinen

メゾ・ソプラノ：ヴァイルピ・ライサネン

Virpi Räsänen, Mezzo-Soprano

ヴァイオリニストから転身した、現在最も人気のあるフィンランド人歌手の一人。2009年ザルツブルク音楽祭でデビュー後、ミラノ・スカラ座やベルリン国立歌劇場ほか世界各地のホールにて、ウィーン・フィルやオランダ室内管などの著名なオーケストラと共演。伝統的なメゾ・ソプラノのレパートリーに加え、現代音楽の第一人者としての地位も確立。多数の世界初演に携わり、彼女のために書かれた作品も多い。歌とヴァイオリンを同時に演奏するプロジェクトVIULAJAを発足。23年には、マティアス・ピンチャー指揮ベルリン・フィルなどと共演。

指揮：マティアス・ピンチャー

Matthias Pintscher, Conductor



© Magdalena Hoefner

1971年生まれ。ドイツ出身の作曲家、指揮者、教育者。20代前半で作曲家として頭角を現す。アンサンブル・アンテルコンタンポラン(以下、EIC)の音楽監督に就任した2013年前後から指揮活動を本格化させ、世界各地のオーケストラを指揮、若手音楽家の教育にも携わる。40代にして「第二のブルーゼ」(ル・モンド紙)と評されたピンチャーが展開する多角的で国際的な活動は、世界の音楽界の注目を集めている。

指揮者としては1994年の実質的なデビュー以来、古典派から現代に至る広範なレパートリーを手がけており、近年はオペラにも取り組む。2019年にウィーン国立歌劇場でオルガ・ノイヴィルトの話題作『オルランド』を世界初演。存命の作曲家兼指揮者として台頭し、22/23シーズンは、ウィーン響、ケルン・ギュルトツェニヒ管、フィラデルフィア管、カンザスシティ響にデビュー、24/25シーズンより音楽監督に就任。

21年のサントリーホール サマーフェスティバルのテーマ作曲家。

東京交響楽団

Tokyo Symphony Orchestra



© N. Ikegami

1946年創立。音楽監督にジョナサン・ノット、正指揮者に原田慶太楼を擁する。文部大臣賞、毎日芸術賞、サントリー音楽賞、川崎市文化賞などを受賞。サントリーホールで定期演奏会を行うほか、川崎市、新潟市と提携し、定期演奏会やアウトリーチを展開している。サントリーホールとの共催による「こども定期演奏会」も注目されており、「サントリーホール サマーフェスティバル」では毎年出演を重ね、高い評価を得ている。新国立劇場では毎年オペラ・バレエ公演を担当。音楽・動画配信サービスをスタートするなどITへの取組みでもクラシック音楽界をリードしている。

テーマ作曲家

オルガ・ノイヴィルト

サントリーホール国際作曲委嘱シリーズNo. 45 (監修：細川俊夫)

Theme Composer OLGA NEUWIRTH

Suntory Hall International Program for Music Composition No. 45 (Artistic Director: Toshio Hosokawa)

8.28

(月) 19:00 ブルーローズ

Monday, August 28, 2023 at 19:00 / Blue Rose

室内楽ポートレート

(室内楽作品集)

Chamber Music Portrait

オルガ・ノイヴィルト ● 『クエーサー／パルサーⅡ』

Olga Neuwirth
(1968-)

ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための (2016)

Quasare / Pulsare II

for Violin, Cello and Piano

ヴァイオリン：石上真由子 チェロ：上村文乃
Mayuko Ishigami, Violin Ayano Kamimura, Cello

ピアノ：大瀧拓哉
Takuya Otaki, Piano

● 『…アド・アウラス…イン・メモリアムH』

2つのヴァイオリンとウッドドラム(任意)のための (1999)

...ad auras... in memoriam H.

for Two Violins and Wooden Drum ad libitum

ヴァイオリン：石上真由子／河村絢音 カホン：篠田浩美
Mayuko Ishigami / Ayane Kawamura, Violin Hiromi Shinoda, Cajón

※本日はカホンで演奏いたします

————— 休憩 intermission —————

● 『インシデント／フルイド』

ピアノとCDプレイヤーのための (2000)

incidendo / fluido

for Piano and CD Player

ピアノ：大瀧拓哉 エレクトロニクス：有馬純寿
Takuya Otaki, Piano Sumihisa Arima, Electronics

● 『マジック・フルイデイティ』

ソロフルート(とタイプライター)のための (2018)

Magic Flu-idity

for Flute Solo (and Typewriter)

フルート：今井貴子 タイプライター：岩見玲奈
Takako Imai, Flute Reina Iwami, Typewriter

● 『スパツィオ・エラスティコ』

アンサンブルのための (2005) [日本初演]

spazio elastico

for Ensemble [Japanese Premiere]

トランペット：篠崎 孝 トロンボーン：村田厚生
Takashi Shinozaki, Trumpet Kousei Murata, Trombone

打楽器：篠田浩美／岩見玲奈 エレキギター：藤元高輝
Hiromi Shinoda / Reina Iwami, Percussion Koki Fujimoto, Electric Guitar

エレクトリック・ピアノ：大瀧拓哉 チェロ：上村文乃
Takuya Otaki, Electric Piano Ayano Kamimura, Cello

ノイヴィルトの音楽の魅力は、まずは何よりも音色の流体的な変化にある。きわめて入念、巧緻に設計された大人の音楽。しかし同時に、フルートにタイプライターを組みあわせたり、ヴァイオリンのデュオにドラムを加えてしまったりする開放的な姿勢は、子どものように奔放だ。大人の技術と子どもの大胆さの結合。それはノイヴィルトの標榜する、男と女の垣根を越えた両性具有的な音楽のあり方とも連動しているのだろう(さらにいえば彼女の作品のタイトルによくみられる「クエーサー／パルサー」といった二つの単語の並列もこうした二面性に関わっている気がする)。

今夜演奏される5曲の室内楽作品はいずれも、ノイヴィルトのそうした魅力をこのうえなく伝えるものだ。

『クエーサー／パルサーII』

ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための (2016)

2017年に初演されたこの作品は、1996年に書かれたヴァイオリンとピアノのための『クエーサー／パルサー』を、チェロを加えた編成にしたもの。

銀河系の中で、膨大なエネルギーによって輝くクエーサー、そしてパルス状の光線や電波を発するパルサーがこの曲の主題だが、まさに楽器群が作る光に満ちた磁場のなかで、小さな粒子がパルスのように飛びかう……ノイヴィルトがイメージしていたのはそんな音風景なのだろう。

ピアノには若干のプリパレーション(弦の間に異物を挟んで音を変化させる手法)が施されるのにくわえて、ヴァイオリンには通常よりも60セント、すなわち半音の3/5だけ低い調弦が求められている(のちの解説でも述べるように、ノイヴィルト作品の多くでは、こうした微細なズレが用いられて、独特の音響を形成する)。

さて、一方で「子ども」のノイヴィルトがここで用いるのが

「E-bow」である。これはもともと、磁気を用いて、近づけるだけでエレキギターを振動させるという小さなエフェクターなのだが、曲中ではピアノの中にこの機械が仕掛けられて、一種のドローンを形成する。

冒頭、E-bowによるド#の音がうっすらと響くなかで曲がはじまり、楽器を叩く音によるパルスが徐々に音程を獲得してゆく。宇宙の創世を思わせる厳かな開始部だ。やがて無窮動的に発展したパルスが、ピアノの大きな下行グリッサンドで区切られると、ハーモニクスをはじめとするヴァイオリンの特殊奏法を中心にした、かそけき響きによる中間部。ピアノが「モールス信号」のような高音をたたき出したあとは、弦楽器のノイズ的音響に、ピアノの鍵盤をプラスチックのスティックで擦る音が重なりあい、終結部へと向かう。

初演 2017年3月17日 ウィーン
トリオ・フリューシュチュック
委嘱・献呈 トリオ・フリューシュチュック

『…アド・アウラス…イン・メモリアムH』

2つのヴァイオリンとウッドドラム(任意)のための (1999)

1999年に書かれたこの曲では、2本のヴァイオリンという「大人」の楽器にたいして、ウッドドラムという「子ども」の楽器が対置されている。さらに、2本のヴァイオリンは「60セント」の差でチューニングされるために、響きは常に一種の揺らぎをはらみながら進んでゆくことになる。

楽曲構造の柱になっているのは、長い持続音と、それを断ち切るような打撃音との対比、そしてやはり固定された持続音とニュロニュロしたグリッサンドの対比といってよいだろう。曲は冒頭から、これらの対比がいくつか組みあわせられながら進んでゆくと、とりわけハーモニクスによる、モスキート音のような超高音の持続は印象的。4分音符の明瞭な音型がまるで「主題」のようにしてあらわれるのも面白い。

様々な対比が崩れ、音楽が呼吸をはじめると、ついにウッドドラムが登場する。どこか調子はずれの舞曲のような、不思議にユーモラスな響き。その後、弦楽器2本によるミニマル風の反復音型や野蛮なダンスを経て、倍音が星座のようにきらめくと、再びドラムが入ってユーモア側へ

と音楽を引き寄せる。ドラムが鳴りやんでからは一種のコーダ。さまざまな動きを回想するかのようにして素材が浮遊する。

初演 1999年11月22日 ミュンヘン
Das Münchner Neue-Musik-Festival pro-Vocazione
イザベル・ファウスト(ヴァイオリン)、ティ・ババヴラミ(ヴァイオリン)、
ハベッテ・ハーグ(打楽器)
委嘱 フォルベルク=シュナイダー財団(ミュンヘン)
献呈 In memoriam H.

『インシデンド／フルイド』

ピアノとCDプレイヤーのための (2000)

ノヴィルトの作品表を眺めていると、ピアノ独奏曲が意外に少ないことに気づく。微細な音色の変化が身上だけに、ピアノを単体で用いるためにはいくつかの工夫が必要ということなのだろう。しかし、2000年に書かれたこの『インシデンド／フルイド』は、いまや多くのピアニストに愛奏される人気曲である。

曲の最大の特徴は、CDプレイヤーをピアノの内部に設置する点。スピーカーから発せられるドローン音は、あらゆる音響の隙間に浸透して、音楽に独特の潤いを与えることになる。また、ピアノの中音域にシリコン、ラバーなどによるプリパレーションが施されるとともに、全編にわたってさまざまな内部奏法が駆使される。かくして一台のピアノから、さまざまな音色が現出することになるわけだ。

曲は冒頭、暴力的なffff(この部分はかなりの程度、奏者の自由にまかされている)で幕を開ける。その後、ドローン音を密かな背景にしながらエチュード的な音型が続くが、両手の音階の微妙に「狂った」響きの設計に作曲者の鋭い耳が感じられよう。

中盤であられるのが和音・クラスターの大ぶりな連打で、この部分の色彩も実に刺激的。やがて内部奏法による倍音、プレイヤーの音響、ミュート音のパルスなどが複雑に絡みあい、ピアノの最低音と最高音の落差を存分に生かしながら、旋回音型へと到達して全曲を閉じる。

初演 2000年4月1日 ウィーン・コンツェルトハウス
マリノ・フォルメンティ(ピアノ)
委嘱 ウィーン・コンツェルトハウス
献呈 ベティ・フリーマン

『マジック・フルイディティ』

ソロ・フルート(とタイプライター)のための (2018)

楽曲のもとになっているのは、2018年に書かれたフルート協奏曲「アエロ」。この協奏曲は、バッハのブランデンブルク協奏曲第4番の対となる曲として作られたために、フルート独奏、トランペット2本に弦楽アンサンブルという、バッハ作品を思わせる編成を持ち、さらには随所でバッハ的な音型が用いられている。同年、この曲のリダクションとして書かれたのが、『マジック・フルイディティ(ただし綴りのFluの後にハイフンが入っている)』である。

原曲では、例によってチェロがA=450Hz、他の楽器はA=443Hzという、微細にズレたチューニングが指定されているのだが、基本的には独奏である『マジック〜』でも、フルートは443Hzに合わせる事が要求されている。

ユニークなのは、フルートにくわえて、タイプライター(オリベッティの名器「レッテラ22」との指定がある)が楽器として使用されることだ。タイプライター奏者はさらに、ベルとグラス(「グラス・ハーモニカ」の要領でグラスを鳴らす)を担当しなければいけないので、なかなか忙しい。

全体は3つの部分からなる(原曲は楽章が3つに分かれているが、『マジック〜』は切れ目なし)。冒頭は、ホイッスル・トーンを交えたフルートとタイプライターがリズムカルに対話を交わすアレグロ的な音風景。途中からは重音奏法をはじめとする多彩な奏法が投入されて、徐々に音響の幅を広げてゆくが、全体にジャズ的ともいってよい軽快さが特徴だ。

グラスによる持続音が響きだすと、第2の部分。ゆったりとした時間が続く中、フルート奏者は声も用いながら、さまざまな特殊奏法をつぎつぎにこなさなければならない。

タイプライターが戻ってくると第3部。ここで突然にあられるのが『ラ・フォリア』の旋律で、ここからはまさに変奏曲のようなフォルムを取りつつ、次第に密度を高めてクライマックスへと向かう。

初演 2019年3月1日 ニューヨーク、The Kitchen
クレア・チェイス(フルート)
委嘱 Pnea Foundation for Density 2036: Part VI
献呈 クレア・チェイス

『スパツィオ・エラストィコ』

アンサンブルのための (2005)

ノイヴィルトの作品には、しばしばロックをはじめとするポピュラー音楽のようなテイストがあらわれるが、2005年に作曲された『スパツィオ・エラストィコ』もそのひとつ。ここでは各楽器が疾走と伸縮を繰り返すなかで、タイトル通り「伸縮する空間」がふわりと聴き手の前にあらわれては消える。

編成とチューニングはここでも工夫が凝らされており、まず、編成はトランペット、トロンボーン、チェロ、打楽器といったクラシック音楽における定番楽器にくわえて、エレキピアノのフェンダー・ローズ(あるいはその音色を模したシンセサイザー)とエレキギターが含まれているのが特徴。

また、チェロは60セントほど高い調弦が求められている一方で、エレキギターは、全体として(弦毎に指定がある)およそ4分音ほど低い音程にセットされる。さらに、エレキギターはE-bow(『クエーサー／パルサー』の解説を参照)にくわえて様々なエフェクターが指定されており、楽曲全体に大きなアクセントを加える役割を果たしている。

冒頭はギターの持続音。やがて細かい旋回音型が音響空間を満たしてゆくが、この中ではギターとチェロのグリッサンドが特徴的。まさにこれらによって音響空間に変形や伸縮がもたらされるわけだ。テンポが緩むと各楽器の指慣らしのようなフレーズが続き、さらには全楽器による強烈なパルスに突入。さらに終盤に入ると、各楽器のグリッサンドが堆積して歪んだ音響があらわれ、最後は断ち切られるようにして、全曲が閉じられる。

Trp (Picc-Trp) / T-Trb - Electric Pf - Vc - Electric Guit - 2 Perc (I=Glock / Cym / Tam-Tam / Gong / Cowbell / 3 Crotales II=Vib / Tom-Tom / 2 Cowbells / Cym / Tam-Tam / 5 Crotales)

初演 2006年2月12日 シュトゥットガルト、Theaterhaus Stuttgart T3
アンサンブル・アスコルタ



© Masatoshi Yamashiro

ヴァイオリン: 石上真由子

Mayuko Ishigami, Violin

日本音楽コンクールなど、国内外で受賞多数。題名のない音楽会、NHKクラシック音楽館などメディア出演多数。東響、都響、読響、日本フィル、ブラショフ国立響など内外で多数のオーケストラと共演。長岡京室内アンサンブル、アンサンブル九条山メンバー。Ensemble Amoise主宰。京都市芸術新人賞、音楽クリティック・クラブ賞、大阪文化祭賞、青山音楽賞、藤堂音楽賞受賞。日本コロムビア、ALTUSよりCD好評発売中。

www.mayukoishigami.com

Twitter: @MayukoIshigami

Instagram: @mayukoishigamiviolin

Facebook: @IshigamiMayuko



チェロ: 上村文乃

Ayano Kamimura, Cello

桐朋学園大学ソリスト・ディプロマ・コース卒業後、ハンブルク音楽演劇大学、パーゼル音楽院、パーゼル・スコラ・カントルム(古楽科)に留学。日本音楽コンクール第2位、イタリア・トレヴィーゾ国際音楽コンクール、インディアナポリス国際パロック・コンクール優勝など入賞歴多数。第23回ホテルオークラ音楽賞受賞、国内外のオーケストラとの共演や霧島国際音楽祭、宮崎国際音楽祭、チェロ・ビエンナーレ・アムステルダムなどの音楽祭に出演。パッハ・コレギウム・ジャパンのメンバーとしても活躍中。ピリオド楽器を用いた歴史的演奏法にも取り組み、活躍の場を広げている。

https://www.ayano-kamimura.com



ピアノ&エレクトリック・ピアノ: 大瀧拓哉

Takuya Otaki, Piano and Electric Piano

愛知県立芸術大学、シュトゥットガルト音楽演劇大学、アンサンブル・モデルン・アカデミー、パリ国立高等音楽院で学ぶ。2016年オルレアン国際ピアノコンクール優勝。その後ヨーロッパ各地で多くのリサイタルや音楽祭に出演。20年には日本演奏連盟主催のリサイタルを東京文化会館小ホールで行い、音楽の友誌にて高い評価を得る。現在東京を中心にクラシックから現代音楽のアンサンブルまで幅広く演奏活動を行う。愛知県立芸術大学非常勤講師。

https://www.takuyaotakipiano.com



© Sumiyo Ida

ヴァイオリン: 河村絢音

Ayane Kawamura, Violin

2015年桐朋女子高等学校音楽科を卒業後、渡仏。パリ国立高等音楽院第一(学士)課程、第二(修士)課程を修了後、第三課程アーティスト・ディプロム現代音楽演奏科、フランクフルト音楽舞台芸術大学大学院修士課程を修了。22年に完全帰国し、現在東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程に在籍。これまでに欧州の音楽祭(プレザンス、メシアン、アンサンブル・フェスティバル、ダルムシュタット、トライエットーリエ、クラングシュペーレン、ダブリン)などで演奏するほか、パリ管弦楽団、アンサンブル・アンテルコンタンポランでの賛助出演、ライブ・エレクトロニクスとの演奏、多数の初演に携わる。

https://www.ayanekawamura.com



打楽器：篠田浩美
Hiromi Shinoda, Percussion

東京藝術大学打楽器科卒業。ソリストとして読売日本交響楽団、吹奏楽団、現代邦楽団と共演し高い評価を得る。作曲家の新曲初演を多数演奏。幼少期よりピアノコンクール、打楽器コンクールで数々の賞を受賞。DTM打ち込み作曲、電子パーカッション、パーティー演奏、イベントの司会など活動の場を広げている。映画『大仏廻国』の音楽担当。和楽器奏者として歌舞伎・邦楽演奏会に多数出演。千葉商科大学、尚美ミュージックカレッジ専門学校非常勤講師。音楽教室「PASSION MUSIC」代表。川口市内の幼稚園で音楽教室を主宰。
https://hiromi-shinoda.com
Twitter: @Hiromi_Shinoda



エレクトロニクス：有馬純寿
Sumihisa Arima, Electronics

エレクトロニクスやコンピュータを用いた音響表現を中心に現代音楽、即興演奏などジャンルを横断する活動を展開、多くの演奏会で音響技術や演奏を手がけ高い評価を得ている。第63回芸術選奨文部科学大臣新人賞(芸術振興部門)受賞。また東京現音計画、東京シンフォニエッタ、秋吉台国際芸術村「パールセポリス」ソリストとして佐治敬三賞受賞。現在、東京音楽大学准教授、帝塚山学院大学、京都市立芸術大学非常勤講師。
Twitter: @sumihisa
Facebook @sumihisa.arima.9

© Saya Nishida



フルート：今井貴子
Takako Imai, Flute

桐朋学園大学卒業後、2005年より渡仏。国立オルネイ・スー・ポワ音楽院にて世界的フルーティストのパトリック・ガロワの元で鍛錬を積む。11年同音楽院最終課程を一等賞を得て修了。同時にディジョン国立地方音楽院の最終課程を一等賞を得て修了。フランス国内のオーケストラの客演、また室内楽奏者として長きにわたり活動を行う。22年より活動の拠点を日本に移し、パロックから即興、現代作品まで、色彩豊かなパフォーマンスが好評を得ている。
Instagram: @takakoimai_flute
Twitter: @takakoimai_fl
Facebook: @TakakoImaiFlutist
https://imaitakako.wixsite.com/flute

© 井村重人



打楽器：岩見玲奈
Reina Iwami, Percussion

2009年ザルツブルク国際マリンバコンクール第1位受賞をはじめ、08年第25回日本管打楽器コンクール第1位、07年ベルギー国際マリンバコンクールソロ部門第2位、10年現代音楽演奏コンクール「競奏XI」第3位・聴衆賞など数多くのコンクールで受賞。東京音楽大学、同大学院を特別特待奨学生として修了。10年、11年度ローム ミュージック ファンデーション奨学生。「オーケストラ・トリプティーク」ティンパニ・打楽器奏者。現在、大阪音楽大学特任准教授。



トランペット：篠崎 孝
Takashi Shinozaki, Trumpet

2008年、洗足学園音楽大学卒業。第81回日本音楽コンクールトランペット部門第1位、E. ナカミチ賞受賞。08年より、大阪フィルハーモニー交響楽団トップトランペット奏者。これまでにリサイタルを、東京、神奈川、徳島、各都市で開催。ソリストとして、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団と共演。トランペットを津堅直弘、栃本浩規、高橋敦、杉本正毅に、室内楽を秋山鴻市に師事。洗足学園音楽大学、大阪音楽大学、大阪芸術大学、各講師。関西トランペット協会常任理事。



トロンボーン：村田厚生
Kousei Murata, Trombone

桐朋学園大学音楽学部卒業。ドイツ学術交流会(DAAD)給費留学生としてベルリン芸術大学卒業。内外の主要な現代音楽祭に出演。モーションセンサーとリアルタイム・エフェクト、またグローバル作品に焦点をあてたシリーズリサイタルを継続中。ユニット「コンテンポラリー・デュオ 村田厚生&中村和枝」ではドイツ、スイス5都市でリサイタルを行った。桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。
https://www.sonata.jp
Facebook: @murata.kousei
Twitter: @KouseiMurata



エレキギター：藤元高輝
Koki Fujimoto, Electric Guitar

1992年東京都北区生まれ。3歳より父からギターの手ほどきを受ける。これまでに村治昇、新井伴典、荘村清志、江間常夫に師事。同時に国内外のギタリストのマスタークラスを多数受講。作曲を塩崎美幸、植田彰、伊左治直に師事。指揮を本多優之に師事。2007年フォンテックよりCD『バルトーク／ルーマニア民族舞曲』を発表。08年、ドイツ3都市(ボン、ケルン、デュッセルドルフ)にてソロコンサートを行う。14年、作曲家今村俊博とのパフォーマンスデュオ[s.b.r.]結成。趣味は囲碁。

オルガ・ノイヴィルト
Olga Neuwirth

→42~43頁参照

サントリーホール国際作曲委嘱シリーズ 委嘱作品一覧

Suntory Hall International Program for Music Composition 1986-2022

No.1	武満 徹 ● ジェモー(双子座) オーボエ、トロンボーン、二つのオーケストラ、二人の指揮者のための Toru Takemitsu: Gémeaux for Oboe, Trombone, 2 Orchestras and 2 Conductors	1986年10月15日	No.23	湯浅 譲二 ● クロノプラスチックII エドガー・ヴァレーズ讃 Joji Yuasa: Chronoplastic II - homage to Edgard Varèse	1999年11月9日
No.2	ヤニス・クセナキス ● ホロス Iannis Xenakis: Horos	1986年10月24日	No.24	ジルベール・アミ ● チェロとオーケストラのための協奏曲 Gilbert Amy: Concerto for Cello and Orchestra	2000年12月4日
No.3	尹 伊桑 ● 交響曲第4番 全2楽章 暗黒の中で歌う Isang Yun: Symphony IV in 2 Sätzen - im Dunkeln singen	1986年11月13日	No.25	ドイナ・ロタル ● 交響曲第3番「スピリット・オブ・エレメンツ」 Doina Rotaru: Symphony No.3 "Spirit of Elements"	2001年9月9日
No.4	ジョン・ケージ ● エトセトラ 2 John Cage: Etcetera 2	1986年12月8日	No.26	エサ=ペッカ・サロネン ● インソムニア Esa-Pekka Salonen: Insomnia	2002年12月1日
No.5	シルヴァーノ・ブソッティ ● カタログ IV オーケストラのための詩第1番 "H III" Sylvano Bussotti: Il Catalogo é Questo IV "H III" - Primo poema per orchestra	1987年2月10日	No.27	ヘルムート・ラッヘンマン ● 書 Helmut Lachenmann: Schreiben	2003年12月4日
No.6	ヴォルフガング・リーム ● 無題 II Wolfgang Rihm: Unbenannt II	1987年10月31日	No.28	ヴィンコ・グロボカル ● 「人質」 大オーケストラとサンプラーのための Vinko Globokar: Les Otages for large orchestra and sampler	2004年8月26日
No.7	バーナード・ランズ ● セレモニアル II Bernard Rands: Ceremonial II	1987年11月14日	No.29	サルヴァトーレ・シャリーノ ● シャドウ・オブ・サウンド オーケストラのための Salvatore Sciarrino: Shadow of sound, for orchestra	2005年8月27日
No.8	ルイジ・ノノ ● 2)進むべき道はない だが進まねばならない……アンドレイ・タルコフスキー 7つのグループのための Luigi Nono: 2) No hay caminos, hay que caminar...Andrei Tarkovskij	1987年11月28日	No.30	マーク=アンドレ・ダルバヴィ ● ヤナーチェクの作品によるオーケストラ変奏曲 Marc-André Dalbavie: Variations orchestrales sur une pièce de Janáček	2006年8月25日
No.9	ルイス・デ・パブロ ● 風の道 Luis de Pablo: Senderos del Aire	1988年11月4日	No.31	ジャン=クロード・リセ ● スキーム ヴァイオリンとオーケストラのための Jean-Claude Risset: Schemes, for violin and orchestra	2007年9月5日
No.10	ルーカス・フォス ● クラリネット協奏曲 Lukas Foss: Clarinet Concerto	1988年12月2日	No.32	ステファノー・ジェルヴァゾーニ ● ルコネサンス Stefano Gervasoni: Reconnaissance	2008年8月29日
No.11	ロディオン・シCHEDROV ● ホロヴォディ(輪舞) オーケストラのための Rodion Shchedrin: Khorovody for Orchestra	1989年11月2日	No.33	ウンスク・チン ● シュウ 中国箏とオーケストラのための協奏曲 Unsk Chin: Šu, concerto for Chinese sheng and orchestra	2009年8月28日
No.12	ロジャー・レイノルズ ● 交響曲「神話」 Roger Reynolds: Symphony "Myths"	1990年10月25日	No.34	ジョナサン・ハーヴェイ ● 80ブレス・フォー・トウキョウ オーケストラのための Jonathan Harvey: 80 Breaths for Tokyo for orchestra	2010年8月30日
No.13	アルネ・ノールヘイム ● モノリス オーケストラのための Arne Nordheim: Monolith for Orchestra	1991年4月2日	No.35	ジュリアン・ユー ● 交響組曲:我らの自然界のために Julian Yu: Symphonic Suite "For Our Natural World"	2011年8月25日
No.14	ペア・ノアグー ● Spaces of Time (時の空間) オーケストラとピアノのための Per Nørgård: "Tidsrum" for Orchestra with Piano	1991年10月7日	No.36	細川俊夫 ● トランペット協奏曲「霧のなかで」 Toshio Hosokawa: Konzert für Trompete und Orchester "Im Nebel"	2013年9月5日
No.15	ホセ・マセダ ● ディステンペラメント(平均律の解体) José Maceda: Distemperament	1992年5月24日	No.37	パスカル・デュサパン ● 風に耳をすませば <small>ハインリヒ・フォン・クライスト原作のオペラ《ペンテシレーア》からの3つの場面</small> Pascal Dusapin: Wenn du dem Wind... (3 scènes de l'opéra Penthesilea d'après Heinrich von Kleist)	2014年8月21日
No.16	ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ ● 3つの宗教的コンチェルト トランペットと器楽アンサンブルのための Hans Werner Henze: Drei geistliche Konzerte for Trumpet and Instrumental Ensemble	1992年11月26日	No.38	ハインツ・ホルガー ● デンマーリヒトー薄明 ソプラノと大管弦楽のための5つの俳句 Heinz Holliger: Dämmerlicht - Hakumei, Fünf Haiku für Sopran und großes Orchester	2015年8月27日
No.17	譚盾 ● オーケストラ・シアターII:Re 二人の指揮者と分割されたオーケストラ、バス、聴衆のための Tan Dun: Orchestral Theatre II: Re for divided Orchestra, Bass voice and Audience with 2 Conductors	1993年7月1日	No.39	カイヤ・サーリアホ ● トランス(変わりゆく) Kaija Saariaho: Trans for harp and orchestra	2016年8月30日
No.18	マグヌス・リンDBELG ● オーラ W. ルトスワフスキの思い出のために Magnus Lindberg: AURA In Memoriam Witold Lutoslawski	1994年6月11日	No.40	ゲオルク・フリードリヒ・ハース ● ヴァイオリン協奏曲第2番 Georg Friedrich Haas: Violin Concerto No. 2	2017年9月7日
No.19	オリヴァー・ナッセン ● ホルン協奏曲 Oliver Knussen: Horn Concerto	1994年10月7日	No.41	イェルク・ヴァイトマン ● ヴァイオリン協奏曲第2番 Jörg Widmann: 2. Violinkonzert	2018年8月31日
No.20	マリー・シェーファー ● 精霊 R. Murray Schafer: Manitou	1995年7月8日	No.42	ミカエル・ジャレル ● 4つの印象 ヴァイオリンとオーケストラのための協奏曲 Michael Jarrell: Vier Eindrücke pour violon et orchestre	2019年8月30日
No.21	ジグムント・クラウゼ ● ピアノ協奏曲第2番 Zygmunt Krauze: Piano Concerto No. 2	1996年10月30日	No.43	マティアス・ピンチャー ● 河[ネハロート] オーケストラのための Matthias Pintscher: neharot for Orchestra	2021年8月27日
No.22	ピーター・スカルソープ ● グレート・サンディ・アイランド Peter Sculthorpe: Great Sandy Island	1998年10月13日	No.44	イザベル・ムンドリー ● 身ぶり ヴィオラとオーケストラのための Isabel Mundry: Gesture for Viola and Orchestra	2022年8月28日

【No.1-22 監修:武満 徹】【No.23-35 監修:湯浅譲二 ※ No.26は武満 徹が指名】【No.36- 監修:細川俊夫】



第33回
芥川也寸志サントリー作曲賞
選考演奏会

The 33rd Competition of Yasushi Akutagawa Suntory Award for Music Composition

8月26日(土) 15:00 大ホール
Saturday, August 26 at 15:00 / Main Hall

協力：(一社)日本作曲家協議会／(一社)日本音楽著作権協会／(特非)日本現代音楽協会
Supported by The Japan Federation of Composers Inc.
Japanese Society for Rights of Authors, Composers and Publishers
Japan Society for Contemporary Music



芥川也寸志サントリー作曲賞 (旧名:芥川作曲賞)

「芥川也寸志サントリー作曲賞」は、戦後のわが国を代表する作曲家・芥川也寸志氏(1925～89年)の功績を記念して、サントリー音楽財団(現・公益財団法人 サントリー芸術財団)が日本作曲家協会の支援を得て1990年4月に創設したものです。

1989年1月の芥川也寸志氏の急逝に際し、故人の深い音楽愛、明晰な音楽観と音楽の振興によせられた熱情を追慕して、作曲家・黛敏郎氏の提唱により5月に開催された追悼演奏会(主催=日本作曲家協会、後援=日本音楽著作権協会、サントリー音楽財団、サントリー株式会社)の収益金を基金の一部としてスタートしました。

前年度に国の内外で初演されたわが国の新進作曲家の作品の中から、もっとも清新で豊かな将来性を内包する作品に贈られます(賞金150万円)。候補作品の演奏直後に選考会が公開で行われるという、作曲賞としてはわが国で初めてのユニークな試みとなっています。さらに、受賞作曲家には新しいオーケストラ作品が委嘱され(委嘱料100万円)、2年後にその初演を行うという複合的な賞です。

サントリー芸術財団の母体となる鳥井音楽財団が1969年に設立されてから50年を迎えた2019年より、賞の志をより明確にするため、「芥川也寸志サントリー作曲賞」へ賞名変更するとともに、賞金を増額いたしました。今後も引き続き日本人新進作曲家のさらなる飛躍を応援していきます。

第33回「芥川也寸志サントリー作曲賞」第一次選考の経過

第一次選考は、2022年1月1日～12月31日に国内外で初演された日本人作曲家の管弦楽作品※を対象に、楽譜と初演録音により本年3月8日にオンラインにて行われ、選考委員3名の合議の末、3作品が候補作品として選ばれました。

※協奏曲や小編成のオーケストラ作品も含む。

第33回 芥川也寸志サントリー作曲賞選考演奏会

The 33rd Competition of Yasushi Akutagawa Suntory Award for Music Composition

8.26(土) 15:00 大ホール
Saturday, August 26 at 15:00 / Main Hall

第31回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞記念サントリー芸術財団委嘱作品

桑原ゆう ● 『^{はちづき}葉落月の段』尺八、三味線、オーケストラのための(2023) [世界初演]
Yu Kuwabara *Falling Leaves Moon Steps* for Shakuhachi, Shamisen and Orchestra
(1984-) [World Premiere, commissioned by Suntory Foundation for the Arts]

尺八: 黒田鈴尊 三味線: 本條秀慈郎
Reison Kuroda, Shakuhachi Hidejiro Honjoh, Shamisen

———— 休憩 intermission ————

第33回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

田中弘基 ● 『^{はちづき}痕跡／螺旋(差延II)』オーケストラのための(2021～22)
Hiroki Tanaka *Trace/Spiral (Différance II)* for Orchestra
(1999-)

向井航 ● 『ダンシング・クィア』オーケストラのための(2022)
Wataru Mukai *DANCING QUEER* for Orchestra
(1993-)
話し手: 塩澤糸 Ito Shiozawa, English Speaker

———— 休憩 intermission ————

松本淳一 ● 『忘れかけの床、あるいは部屋』
Junichi Matsumoto スコルダトゥーラ群とオーケストラのための(2016/18/22)
(1973-) *Half-Forgotten Floors, or Rooms* for Scordatura Group and Orchestra

指揮: 石川征太郎 新日本フィルハーモニー交響楽団
Seitaro Ishikawa, Conductor New Japan Philharmonic

———— 休憩 intermission ————

第33回芥川也寸志サントリー作曲賞 選考および表彰

Open Screening

選考委員(50音順): 稲森安太己/小鍛冶邦隆/渡辺裕紀子
Yasutaki Inamori / Kunitaka Kokaji / Yukiko Watanabe, Jury

司会: 白石美雪
Miyuki Shiraishi, MC



桑原ゆう

■ 第31回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞記念サントリー芸術財団委嘱作品

は お ち づ き 『葉落月の段』

尺八、三味線、オーケストラのための (2023)

曲名と楽器編成から、この作品の意図するところを汲み取っていただけると思う。

西洋楽器と邦楽器とがそれぞれに背負う音や音楽の質、その音楽を成り立たせる言語構造や文脈は、まったくちがっている。私がつくりたいのは、両者のちがいをただ対比して見せる音楽でも、わざと均して扱う音楽でもない。ちがいの奥にある、各々の音楽をその音楽たらしめる「いのち」を見きわめ、その「いのち」がそのまま縦横無尽に、存分に躍動しながら、互いに互いの表になり裏になり、支え合い、共生して、ひとつの形をさがしていく…、そんな音楽である。

そういう音楽を試行錯誤しながら、自分の生を確かめ、洋の東西もない、音や音楽の普遍性や核心に迫ろうとするのが、私の作曲である。

Solo Shakuhachi – Solo Shamisen – 2 Fl (2 Picc / A-Fl) / 2 Ob / 2 Cl (Bs-Cl) / Fg / C-Fg – 2 Hrn / 2 Trp / 2 Trb / Tub – 4 Perc (I=Chinese Cym / Tam-Tam / Ratchet / 3 Gongs / 2 Wood Blocks II=Bass Drum / 2 Wood Blocks III=Vib / Guiro / Bongos / Hi-Hat / Ratchet IV=2 Timp / Wood Block / Rins on Timp) – Pf – Hrp – Strings (12-12-10-8-6)

桑原ゆう ● Yu Kuwabara

1984年生まれ。東京藝術大学および同大学大学院修了。日本の音と言葉を源流から探り、文化の古今と東西をつなぐことを軸に創作を展開。国立劇場、静岡音楽館AOI、神奈川県立音楽堂、横浜みなとみらいホール、箕面市立メイプルホール、ルツェルン音楽祭、ACHT BRÜCKEN(ケルン)、ZeitRäume(バーゼル)、Transit 20・21(ルーヴェン)、I&I Foundation(チューリヒ)など、国内外で多くの委嘱を受け、世界各地の音楽祭や企画で作品が取り上げられている。楽譜は主にEdition Gravisより出版。「淡座」メンバー。国立音楽大学、洗足学園音楽大学非常勤講師。第31回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。https://3shimai.com/yu/



©hiro.pberg_berlin

田中弘基

■ 第33回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『痕跡／螺旋(差延II)』

オーケストラのための (2020~21)

初演 2022年5月21日 東京藝術大学演奏堂
藝大定期 第410回 藝大フィルハーモニア管弦楽団 新卒業生紹介演奏会

本作のタイトルにおけるTraceは、名詞としての「痕跡」の意味合いと、他動詞的な、「(「痕跡」を) 追う、辿る」という2つの意味合いを持っている。則ち音楽は常に、現前する音楽に先立つ音響や素材の「痕跡」を「辿り」、そうして形成された複数の層を順次出現させ、あるいは同時にコラージュすることによって全体が構成される。「痕跡」として幾度か出現・あるいは仄めかされる音響や素材を、時間的な隔たり(遅延)と共に、新しい文脈の中で他の音響や素材との「差異」によって新たに定義し続けることで、そこに決して一定の「主題—展開」的機能を生じさせず、各音響・素材の意味性が時間を超越して流動的に変化していく形式を模索した。サブタイトルにあるとおり、フランスの哲学者・思想家ジャック・デリダの造語である、Différance、日本語では「差延」と訳される概念、即ち(簡潔に述べれば)言語の意味を、差異と遅延の運動によって規定するアイデアからヒントを得て、このコンセプトを設定した。またSpiralとは、作中頻繁に現れる微分音を含んだ複数のモードが、オクターヴを内部でほとんど生じず、「螺旋」的な構造を持つことに由来する。ピッチ(音高)の選択は原則としてこれらのモードの基本形あるいは移行形に基づいて行われ、また時にはモード内のいくつかの構成音を「中心音」としてパッセージが生成されることもある。同時に、このモードではシメトリカルな音程の分割が見られる。以上のことから、「オクターヴ」とその結果を内包する「自然倍音列」(則ち非シメトリカルな音程分割)によって豊かな響きを志向する、本来のオーケストラ音響の設計方法とは異なったものを意図している。

3 Fl (A-Fl / Picc) / 2 Ob (E-Hm) / 2 Cl (Bs-Cl) / 2 Fg / C-Fg – 4 Hrn / 2 Trp / 2 Trb / Bs-Trb / Tub – Timp (Tri) / 4 Rins on Timp / Suspended Cym on Timp / Corrugated Conduit / Spring Coil / Buzzling Bow) – 4 Perc (I=Mar / Crotales / Vibraslap / Snare Drum / Thunder Sheet / Suspended Cym II=Chromatic Gongs / Thai Gongs / Sizzle Cym / Suspended Cym / Hi-Hat / Flexatone / 2 Cowbells / 5 Temple Blocks / Wind Chimes / Corrugated Conduit / Bell Tree III=Bass Drum / Tri / Ratchet / Harmonic Pipe / 5 Wood Blocks IV=Vib / Lion's Roar / 5 Toms / Wind Machine) – Hrp – Pf – Strings (12-10-8-6-4)

田中弘基 ● Hiroki Tanaka

1999年6月23日神戸市生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、2022年同大学作曲科を首席で卒業。卒業作品が大学買上となる。第38回現音作曲新人賞受賞。齊木由美、小鍛治邦隆、折笠敏之に師事。現在、ドレスデン音楽大学修士課程作曲科にて、Mark Andre、Stefan Prinsに師事。



向井航

■ 第33回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『ダンシング・クィア』

オーケストラのための (2022)

初演 2022年9月17日 杉並公会堂 大ホール
アンサンブル・フリーEAST 第17回演奏会

この作品は、アメリカ・フロリダで起きたゲイナイトクラブでの銃乱射事件および、ヴォーグなどのダンス・ムーブメントを含めたクィアのアクティビズムをテーマに、拡声器を持った英語話者による話し手とオーケストラのために作曲した。曲の冒頭は、クィアにとって最初のアクティビズムとなる『Das lila Lied』の歌詞の引用から始まり、その後第一部ではクィアなアイデンティティの解放と表現を行うヴォーグについて、第二部ではアメリカのフロリダで起きたゲイナイトクラブでの銃乱射事件について、ヴォーグダンサーや著名人、政治家の言説や演説を引用し、構成している。

この作品がアーティスティックなドキュメンタリー演劇になるよう、私は主にドキュメンタリー映画で使われるような映像編集技術を音楽変換することで、作品を演出した。またヴォーグを作品に落とし込むために、代表的なモーションからインスパイアされた響きのモメントを作り出し、それをクィアの人々に向けられた政治家やアーティストの切り刻まれたスピーチと共に繰り返した。打楽器のAnvilによって区切られる仕切りの中で強迫的に繰り返される細切れのスピーチは、徐々に前後の文と繋がることで、緊迫と連帯の中、ドキュメンタリー性をより強めていく。

さらにLGBTIQ+の象徴でもあるレインボーフラッグがヒッピームーブメントからも参照されたことから、私の過去の作品から『極彩色—Prinsessegade,1440』(ヒッピーの楽園クリスチャニアをテーマに作曲)、ゲイアイコンであるジュディ・ガーランドの『Somewhere over the Rainbow』、ベルリンのクィア・クラブで流れていたビート(前述のゲイクラブ銃乱射事件でも、犠牲者の追悼のために、ロンドンでヴォーグを踊り続ける動画が、SNSで急速に拡散された。クィアにとって踊ることは今もなお重要な意味がある)、様々なクィア音楽を引用し、平和と愛、そして“You are not alone”のメッセージと共に、作品のアクティビズム性は強調される。

私は、言葉と音楽の力を信じている。この作品はクィアを生きる「私」の言説である。

English Speaker—2 Fl / 2 Ob / 2 Cl (Bs-Cl) / 2 Fg—4 Hrn / 2 Trp / 2 Trb / Bs-Trb / Tub—4 Perc (I=Suspended Cym / Timp / Anvil II=Snare Drum / Cans / Glock / Shaker / Tri / Whip III=植木鉢 / Congas / 2 Wood Blocks / Hi-Hat / Cowbell / Ratchet IV=Bass Drum / Toms)—Pf—Strings

向井航 ● Wataru Mukai

1993年7月22日静岡県生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科を首席卒業後、渡独。受賞歴に安宅賞、クワアチア国際作曲コンクール優勝、メンデルスゾーン全音楽大学コンクール独連邦大統領賞、日本音楽コンクール作曲部門第2位および岩谷賞、第27回芥川作曲賞最終候補など。現在アントン・ブルックナー私立大学博士研究員。



©砂原文

松本淳一

■ 第33回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『忘れかけの床、あるいは部屋』

スコルダトゥーラ群とオーケストラのための (2016/18/22)

初演 2022年11月10日 NHK505スタジオ
日本音楽コンクール作曲部門本選

この曲は「忘れる」「思い出す」といった私たち個々の認知、その体感や共通性について、下記の如く連続する楽章を用い表そうとしたものです。

“固有ピッチ群による、5つの前提=床”

“オケピッチとの併走による、8つの体験=部屋”

具体的には、冒頭、各々固有な調律設定を施したスコルダトゥーラストリング群が【床】=前提を担当、そのピッチ感やリズムがほぼ全体に渡り奏される中、オーケストラは従来の調律ピッチ442Hzを貫きながら、この背景の如く続く【床】上にて都度多様な【部屋】=体験を形創ります。

最初に【FLOOR 1/2/3/4/5】の5セクションが提示された後【ROOM 1/2/3/4/5/6/7/8】と進み、途中二度Remembering Floorというインターロールドが挿まれ、最後【床】の変容や消失を経て全体を閉じます。【床】のピッチと【部屋】すなわちオーケストラピッチの強固で微細なズレは、床面に絶えず差異、相克、対立、曖昧、混沌、同化などを浮かび上がらせますが、時間経過や音量バランス、反復や再現などの手法により、徐々に忘れ去られたり思い出ししたりします。

ところで、私には時に、体験の記憶や認知がその人の「前提」のような部分と深く結びついて映ります。それは音楽でも同様、人は自己の体験前提と楽曲前提の掛け合わせ上に音を聴取していく部分があると思います。今作では、この楽曲前提またはフィルターと呼ぶべき動きの一部を「スコルダトゥーラ群による一定した感触」としてあります。ご自由にご聴取をお楽しみ下さい。

一方、作曲家としては、音楽や時代の集合的な記憶に蓄積された前提やパターン、好みや常識などの強力さを改めて考えます。

今作品全体は、そうした、人が無自覚に持ちあっている集合認知、その氷山の一角をツツツツつについてみたい……、そんな個人的欲望によっても紐づけられています。

3 Fl (Picc) / 2 Ob / 2 Cl / 2 Fg / C-Fg — 4 Hrn / 3 Trp (Picc-Trp) / 2 T (Bs)-Trb / Bs-Trb / Tub — 4 Perc (I=Bass Drum / Mar / Cym / Cowbell / Bow of DB II=Suspended Cym / Glock / Guiro / Tri / Wind Chimes / Cowbell / Bow of DB / Electric Metronome III=Snare Drum / Tam-Tam / Antique Cym / Whip / Cabasa / Cowbell / Stand Cym / Bow of DB and Superball Mallet IV=Timp / Anvil / Flexatone / 2 Shakers / Wood Blocks / Ratchet / Chimes / Tri / Big Stainless Bowl / Bow of DB and Superball Mallet) — Pf — Cel — Strings (12-10-8-5-6) — Scordatura Group=Strings (2-2-2-3) / Hrp

松本淳一 ● Junichi Matsumoto

1973年4月20日北海道釧路市生まれ。国立音楽大学作曲学科卒業。エリザベート王妃国際音楽コンクール作曲部門ファイナリスト賞、日本アカデミー賞優秀音楽賞、第91回日本音楽コンクール作曲部門第2位。新国立劇場バレエ工団委嘱『竜宮』(森山開次作・演出)や東京パラリンピック開会式「片翼の小さな飛行機」など作品や活動内容は様々。



指揮：石川征太郎
Seitaro Ishikawa, Conductor

東京藝術大学音楽学部指揮科、デュッセルドルフ・ロベルト・シューマン音楽大学指揮科卒業。藝大卒業時にアカンサス音楽賞受賞。2011、12年度ローム ミュージック ファンデーション奨学生。第1回フェリックス・メンデルスゾーン国際指揮者コンクール第2位。ゲルハルト・ボッセ後任として神戸市室内管の指揮者を務める。ケルン放送管、ベルギッシュ響、スイス・ボズヴィル・アンサンブル、読響、日本フィル、アンサンブル金沢などを指揮。指揮をハンズ=マルティン・シュナイト、リュウディガー・ボーンなどに師事。



©ヒダキトモコ

尺八：黒田鈴尊
Reison Kuroda, Shakuhachi

人間国宝二代青木鈴慕、三代青木鈴慕に師事。国際尺八コンクール 2018 in ロンドン優勝。利根英法記念邦楽コンクール最優秀賞。ARS MUSICAにて武満徹『ノヴェンバー・ステップス』ほか、山本和智、クロード・ルドゥ、藤倉大ほか多くの尺八協奏曲のソリストを務める。世界中での独演会、新作初演を通じ、尺八の今とこれからの無限の可能性を追求。TVやラジオ、CD、新作歌舞伎などにも音源提供多数。アンサンブル室町、邦楽四重奏団、The Shakuhachi 5、RigarohieSメンバー。令和元年度文化庁文化交流使。



三味線：本條秀慈郎
Hidejiro Honjoh, Shamisen

本條秀太郎に師事。桐朋学園大学短期大学部卒。ACCフェロー受給によりNYに留学。文化庁文化交流使。ロンドン・ウィグモアホールにてソロリサイタル。藤倉大作曲『三味線協奏曲』を世界初演し現在国内外で再演を重ねる。坂本龍一と3度共演。芸術選奨文部科学大臣新人賞。文化庁芸術祭新人賞、出光音楽賞、京都青山音楽賞青山賞など受賞。2022年、一柳慧作曲『ヴァイオリンと三味線のための二重協奏曲』を世界初演し、公演は第77回文化庁芸術祭大賞を受賞。ジョン・ケーヅらが務めたアメリカUC DAVISのアーティスト・イン・レジデンスに選出。



©K.MIURA

新日本フィルハーモニー交響楽団
New Japan Philharmonic

1972年、指揮者・小澤征爾、山本直純のもと自主運営のオーケストラとして創立。97年、すみだトリフォニーホールを本拠地とし、日本初の本格的フランチャイズを導入。定期演奏会や特別演奏会のほか、地域に根ざした演奏活動も精力的に行う。新日本フィル・ワールド・ドリーム・オーケストラの音楽監督に久石譲(2004年～)、久石は新日本フィル Music Partner(20年～)も歴任。23年4月より佐渡裕が第5代音楽監督に就任。街・ホール・オーケストラが一体となった音楽活動を行う。

www.njp.or.jp
Twitter: @newjapanphil
Facebook: /newjapanphil
Instagram: /newjapanphil

「第33回芥川也寸志サントリー作曲賞選考演奏会」 応援企画

前回の投票率は
53%

SFA総選挙～あなたの、清き、耳の一票を！

本日の公演で、賞にノミネートされた3作品を聴いて、あなたが最も「いいなあ」と思った作品に1票を入れてください。

作曲家への感想、応援コメントも受け付けます。

皆様から寄せられる一票が、今後の活動の励みになります。

たくさんの方の投票をお待ちしております！

投票資格：候補作品の演奏を3曲とも聴くことができる方

投票時間：演奏会終了後、公開選考会が始まるまで

投票場所：ホワイエ(ロビー)の投票箱

※ 得票結果は、作曲賞決定後に発表します。

※ SFA総選挙は演奏会の応援企画として非公式に実施するものであり、その結果は公開選考会での選考には一切関係しません。

今までに寄せられた感想、応援コメント

- 昨年この曲を聴き、もう二度とこのような大編成のオーケストラ曲を聴くことはないのかなと、とても残念に思っていました。今回再び出逢えて、最高です！演奏家の技術にも驚嘆しました。
- 作曲家の方の解説にアンチヒーローとありましたが、私は何故かルパン三世がお城の財宝をうばっているスリリングさや後半は仮装して舞踏会に出ている優雅さを感じました。
- 血が騒ぎました。
- 奇をてらうことがない、現代音楽の王道を堪能した。ピアノの効果が素晴らしい。
- 年が近い方がこうして頑張っていることに感化されました、私も頑張ります！
- 鳴り続けるパートが長く続き耳が慣れてしまい、意識が引き込まれる瞬間があまりなかった。
- ブラボー!!! 日本に祭りに戻ってきた!!! アンタが1番!!!
- 演奏者の皆さんの演奏する顔が一番生き生きとしていました。
- 引用作品で、引用した作品よりおもしろい部分はどこにあるのだろう...
- 作風・音楽性の違い以前に、「何を以て作曲とするか」その定義にそれぞれの作曲家の主張の違いが感じられた。
- サントリーホールでお偉い先生方の前でジャズドラム鳴らすの最高にロックで好きです。
- イベントとして面白いのはこの作品だと思うが、オケの定期では演奏できないだろう。
- 緊密度、緊張感の喚起度において随一であり、沈黙の深さも効果抜群でした。
- 音や音響は二次的なもので、作品は何か伝えたいことや、想いから生まれてほしい。実験や試みでは、音楽にはならない。すべての作品がそうではないが、毎年この芥川作曲賞で思うことだ。
- クラシックを聴くのは10年以上ぶりで全く詳しくありませんが楽しめました。自然染めのような色と砂と汗が見えました。
- ラヴェルがボレロを初演した時の興奮ってこんな感じだったのかなと思いました。

●過去の受賞者・受賞作品・委嘱作品

回数	受賞者	受賞作品	委嘱作品	選考委員	司会者
第1回 1991年	高橋 裕 (1953年生)	Symphonic Karma	Piano Concerto (1993年8月28日 世界初演)	團伊玖磨 松村禎三 黛 敏郎	船山 隆
第2回 1992年	山田 泉 (1952-99)	一つの素描 ～ピアノとオーケストラによるII	十二の風景 ～ヴィオラとオーケストラによる (1994年8月27日 世界初演)	武満 徹 松村禎三 黛 敏郎	船山 隆
第3回 1993年	菊池幸夫 (1964年生)	ピアノと管弦楽のための 「曜変」	譚歌 ～管弦楽のための (1995年8月27日 世界初演)	一柳 慧 松村禎三 黛 敏郎	武田明倫
	猿谷紀郎 (1960年生)	Fiber of the Breath (息の綾)	互響應斥～Mutual Recognition (1995年8月27日 世界初演)		
第4回 1994年	江村哲二 (1960-2007)	ヴァイオリン協奏曲第2番 「インテクステリア」	プリマヴェーラ(春) (1996年8月29日 世界初演)	武満 徹 松村禎三 黛 敏郎	武田明倫
第5回 1995年	伊左治直 (1968年生)	畸形の天女／七夕	美貌の青空 (1997年8月31日 世界初演)	一柳 慧 黛 敏郎 湯浅譲二	船山 隆
第6回 1996年	権代敦彦 (1965年生)	DIES IRAE/ LACRIMOSA (怒りの日／嘆きの日)	Father Forgive ～The Litany of Reconciliation～ + In Paradisum (1998年8月29日 世界初演)	池辺晋一郎 松村禎三 黛 敏郎	船山 隆
第7回 1997年	川島素晴 (1972年生)	Dual Personality ～打楽器独奏と 2群のオーケストラのための	Manic-Depressive III for piano, prepared piano and orchestra (1999年8月29日 世界初演)	一柳 慧 林 光 松村禎三	武田明倫
第8回 1998年	伊藤弘之 (1963年生)	2台のピアノとオーケストラのための 「シーシュポスの神話」	オーケストラのための ミラーII (2000年8月27日 世界初演)	一柳 慧 松村禎三 湯浅譲二	武田明倫
第9回 1999年	菱沼尚子 (1970年生)	REFLEX for piano and orchestra	クラウド・キャッスル (2001年8月26日 世界初演)	石井真木 松村禎三 湯浅譲二	船山 隆
第10回 2000年	望月 京 (1969年生)	カメラ・ルシダ	オメガ・プロジェクト (2002年8月25日 世界初演)	池辺晋一郎 松村禎三 湯浅譲二	武田明倫
第11回 2001年	原田敬子 (1968年生)	響きあう隔たりIII	第3の聴こえない耳III ～オーケストラのための (2003年8月31日 世界初演)	池辺晋一郎 西村 朗 細川俊夫	白石美雪
第12回 2002年	夏田昌和 (1968年生)	アストレーション ～オーケストラのための 「ジェラルド・クリゼイの追憶に」	オーケストラのための「重力波」 (2004年8月29日 世界初演)	一柳 慧 近藤 譲 西村 朗	白石美雪
第13回 2003年	山本裕之 (1967年生)	カンテイクム・トレムルムII	モノディ協同体 (2005年8月28日 世界初演)	近藤 譲 野平一郎 林 光	沼野雄司
第14回 2004年	三輪真弘 (1958年生)	村松ギヤ・エンジンによる ポレロ	弦楽のための369、 B氏へのオマージュ (2006年8月27日 世界初演)	猿谷紀郎 野平一郎 湯浅譲二	沼野雄司
第15回 2005年	斉木由美 (1964年生)	アントモフォニーⅢ	アントモフォニーⅥ (2007年9月2日 世界初演)	猿谷紀郎 野平一郎 湯浅譲二	佐野光司
第16回 2006年	樺場富美子 (1952年生)	未風化の七つの横顔 ～ピアノとオーケストラの為に	月を食う空の獅子 ～トロンボーンとオーケストラの為に (2008年8月31日 世界初演)	江村哲二 細川俊夫 湯浅譲二	佐野光司

回数	受賞者	受賞作品	委嘱作品	選考委員	司会者
第17回 2007年	小出稚子 (1982年生)	ケセランパサラン	ChOcoLaTé チョコレート (2009年8月29日 世界初演)	池辺晋一郎 一柳 慧 原田敬子	白石美雪
第18回 2008年	法倉雅紀 (1963年生)	延喜の祭禮 第二番 ～室内オーケストラのための	留火之(ともしびの) ～独奏チェロとオーケストラのための (2010年8月29日 世界初演)	近藤 譲 原田敬子 松平頼暁	白石美雪
第19回 2009年	藤倉 大 (1977年生)	... as I am ...	オーケストラのための 「トカール・イルチャール」 (2011年8月28日 日本初演)	斉木由美 三枝成彰 松平頼暁	沼野雄司
第20回 2010年	山根明季子 (1982年生)	水玉コレクション No.04 室内オーケストラのための	ハラキリ乙女 ～琵琶とオーケストラのための～ (2012年8月26日 世界初演)	三枝成彰 猿谷紀郎 湯浅譲二	沼野雄司
第21回 2011年	山内雅弘 (1960年生)	そら かたち 「宙の形象」 ピアノとオーケストラのための	そら 宙の記憶 オーケストラのための (2013年9月1日 世界初演)	伊左治直 新美徳英 湯浅譲二	白石美雪
第22回 2012年	新井健歩 (1988年生)	聞きあう先に ～オーケストラのための～	タクトゥス TACTUS (2014年8月31日 世界初演)	北爪道夫 高倉 裕 原田敬子	片山杜秀
第23回 2013年	酒井健治 (1977年生)	ヴァイオリンとオーケストラ のための協奏曲	ヴァイオリン協奏曲「G線上で」 (2015年8月30日 世界初演)	伊藤弘之 川島素晴 嵯場富美子	片山杜秀
第24回 2014年	鈴木純明 (1970年生)	ラ・ロマネスカ II ～パトルッチの遍歴～管弦楽のための	チューノと管弦楽のための《1920》 (2016年8月28日 世界初演)	小鍛冶邦隆 福士則夫 望月 京	岡部真一郎
第25回 2015年	坂東祐大 (1991年生)	ダミエ & ミスマッチ J.H:S	花火 -ピアノとオーケストラのための協奏曲 (2017年9月2日 世界初演)	池辺晋一郎 山根明季子 山本裕之	柿沼敏江
第26回 2016年	渡辺裕紀子 (1983年生)	折られた...	朝もやジャンクション (2018年8月26日 世界初演)	小出稚子 法倉雅紀 三輪真弘	柿沼敏江
第27回 2017年	茂木宏文 (1988年生)	不思議な言葉でお話ししょ!	雲の記憶 チェロとオーケストラのための (2019年8月31日 世界初演)	酒井健治 西村 朗 山内雅弘	長木誠司
第28回 2018年	坂田直樹 (1981年生)	組み合わされた風景 オーケストラのための	手懐けられない光 オーケストラのための (2020年8月29日 世界初演)	鈴木純明 野平一郎 菱沼尚子	伊東信宏
第29回 2019年	稲森安太己 (1978年生)	擦れ違いから断絶 大アンサンブルのための	ヒュボムネーマタ ピアノとオーケストラのための (2021年8月28日 世界初演)	斉木由美 坂東祐大 南 聡	伊東信宏
第30回 2020年	小野田健太 (1996年生)	シンガブル・ラブII - feat. マジシカーダ オーケストラのための	綺羅星 2台のピアノとオーケストラのための (2022年8月27日 世界初演)	金子仁美 福井とも子 望月 京	長木誠司
第31回 2021年	桑原ゆう (1984年生)	タイム・アビス 17人の奏者による 2群のアンサンブルのための	ほおろぎ 葉落月の段 尺八、三味線、オーケストラのための (2023年8月26日 世界初演)	近藤 譲 坂田直樹 原田敬子	沼野雄司
第32回 2022年	波立裕矢 (1995年生)	失われたイノセンスを追う。II オーケストラのための	委嘱中 (2024年8月 初演予定)	酒井健治 福士則夫 山根明季子	沼野雄司



あの日が目に浮かぶ 音楽がある

著作権をまもることは、未来に音楽をつないでいくこと

記憶に残るメロディや歌詞。心をふるわす音楽に出会った歓び。

音楽とその想いが未来へずっとつながるように。

私たちJASRACは、著作権をまもり、音楽を生み出す作詞家・作曲家などの創作活動をこれからもしっかりと支えていきます。

JASRAC[®]

一般社団法人 日本音楽著作権協会

〒151-8540 東京都渋谷区上原3-6-12 TEL (03) 3481-2121 (大代表)
www.jasrac.or.jp

★2023年演奏曲リスト

※作曲家の生年順に掲載 ※初演情報のうち、日付の入っているものは日本初演の日付を表す

公演日	作曲家名	生没年	作品名	作曲年	日本初演情報	頁
2023. 8. 24	アレクサンドル・スクリャーピン	1872～1915	交響曲第4番 作品54「法悦の詩」	1905～08	1928. 4. 22	62
2023. 8. 27	ホセ・マセダ	1917～2004	『コングと竹のための音楽』ガムランと箏笛(ピッコロ)、コントラファゴット、打楽器、合唱団のための	1997	1997. 11. 8	26
2023. 8. 27	藤枝 守	1955～	『ピアノとガムランのためのコンチェルトno.2』	2023	世界初演	24
2023. 8. 27	野村 誠	1968～	『タリック・タンパン』	2023	世界初演	30
2023. 8. 24	オルガ・ノイヴィルト	1968～	『オランダ・ワールド』	2023	世界初演	56
2023. 8. 24			『旅/針のない時計』オーケストラのための	2013	日本初演	59
2023. 8. 28			『クエーサー/バルサーII』ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための	2016	不明	72
2023. 8. 28			『…アド・アウラス…イン・メモリアムH』2つのヴァイオリンとウッドドラム(任意)のための	1999	不明	73
2023. 8. 28			『インシデント/フルイド』ピアノとCDプレイヤーのための	2000	不明	74
2023. 8. 28			『マジック・フルイディティ』ソロ・フルート(とタイプライター)のための	2018	不明	75
2023. 8. 28			『スパツィオ・エラスティコ』アンサンブルのための	2005	日本初演	76
2023. 8. 26	松本淳一	1973～	『忘れかけの床、あるいは部屋』スコルダトゥーラ群とオーケストラのための	2016/18/22	2022. 11. 10	89
2023. 8. 27	宮内康乃	1980～	『Sin Ra』ジャワ・ガムランと声のために	2023	世界初演	25
2023. 8. 27	小出稚子	1982～	『Legit Memories (組曲 甘い記憶)』	2023	世界初演	27
2023. 8. 26	桑原ゆう	1984～	『葉落月の段』尺八、三味線、オーケストラのための	2023	世界初演	86
2023. 8. 24	ヤコブ・ミュールラッド	1991～	『REMS』(短縮版)オーケストラのための	2021/23	世界初演	55
2023. 8. 26	向井 航	1993～	『ダンシング・クィア』オーケストラのための	2022	2022. 9. 17	88
2023. 8. 26	田中弘基	1999～	『痕跡/螺旋(差延II)』オーケストラのための	2021～22	2022. 5. 21	87

サントリーホール サマーフェスティバル2024

Suntory Hall Summer Festival 2024

2024年8月22日(木)～8月29日(木)

●ザ・プロデューサー・シリーズ アーヴィン・アルディッティ

The Producer Series IRVINE ARDITTI

●テーマ作曲家 フィリップ・マヌリ

サントリーホール国際作曲委嘱シリーズNo. 46 (監修: 細川俊夫)

Theme Composer PHILIPPE MANOURY

Suntory Hall International Program for Music Composition No. 46 (Artistic Director: Toshio Hosokawa)

●第34回芥川也寸志サントリー作曲賞選考演奏会

The 34th Competition of Yasushi Akutagawa Suntory Award for Music Composition

委嘱新作初演(第32回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞記念サントリー芸術財団委嘱作品)

作曲家: 波立裕矢

New Work Commissioned by Suntory Foundation for the Arts

Composer: Yuya Haryu

耳が目覚める! 頭に響く! 圧倒的ナナメ上 音楽フェス!

サマーフェスティバル2023 プログラム

発行	サントリーホール
編集	株式会社 東京コンサーツ
	荒井恵理子
デザイン	長田彰デザイン室
印刷	杜陵印刷株式会社

公益財団法人 サントリー芸術財団について

サントリーは、社会貢献を根底に据えた「利益三分主義」を経営哲学としてきた企業です。創業者鳥井信治郎による福祉事業への取組みに続いて、後を継いだ佐治敬三は、芸術文化活動において1961年に「サントリー美術館」を開館、1969年にサントリー音楽財団（旧：鳥井音楽財団）を設立、1986年には「サントリーホール」を開場しました。創業110年を迎えた2009年には、美術と音楽を中心とした芸術分野の社会貢献活動を大きくひとつに束ね、「公益財団法人 サントリー芸術財団」を設立。人々に生きる喜びや生活の潤いを感じていただけるよう幅広い事業活動を行っています。

■ コンサート事業

音楽文化の振興を目的に、サントリーホールでの「チェンバーミュージック・ガーデン」「サマーフェスティバル」をはじめ、国内外の一流アーティストによる年間約80公演の自主企画公演を開催しています。次世代を担う子どもたちや若い音楽家の育成に加え、より多くの人に音楽の喜びを体験していただく「ENJOY! MUSICプログラム」も行っていきます。

■ 展覧会事業

「美を結ぶ。美をひらく。」をミュージアムメッセージに掲げ、サントリー美術館にて日本の古美術を中心とした年間5〜6回の企画展を開催。日本美術に気軽に親しんでいただく様々なラーニングプログラムや小中学生の常時入館無料も実施しています。

■ 顕彰事業

日本の洋楽文化の発展に寄与することを目指し、洋楽の分野において優れた業績をあげた個人または団体、公演、作品を顕彰しています。

<サントリー音楽賞>

1969年に創設され、その年のわが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績のあった個人または団体に贈られます。（賞金700万円）

<佐治敬三賞>

2001年に創設され、チャレンジ精神に満ちた企画で演奏成果の優れた国内公演に贈られます。（賞金200万円）

<芥川也寸志サントリー作曲賞>（旧名：芥川作曲賞）
故 芥川也寸志氏の功績を記念して1990年に

創設され、前年の新進日本人作曲家の優れたオーケストラ楽曲の中から、もっとも清新かつ将来性に富む作品1曲が公開の選考演奏会で選定されます。（賞金150万円）また、受賞者には新しいオーケストラ楽曲が作曲委嘱され、2年後の同賞公開選考演奏会にて初演されます。（委嘱料100万円）

■ 助成事業

財団が所蔵する弦楽器の世界的名器を保全し後世に継承するとともに、若手日本人音楽家の育成を目的として、中高生へ3年間無償でヴァイオリンを貸与する「サントリー芸術財団名器特別賞」や、世界を舞台に活躍する若手演奏家への弦楽器貸与も行っていきます。

■ 出版事業

わが国の作曲家の創造活動の振興と作品の普及をはかるため、現代音楽作品の論評とデータを掲載した「日本の作曲」を出版、当財団ホームページにて無料で公開しています。

■ ウィーン・フィル&サントリー音楽復興基金

音楽を通じた東日本大震災復興への継続的な支援のために、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とサントリーホールディングス株式会社が、マッチングファンドによる基金を2012年に設立しました。被災地のみならず日本全体を音楽の力で元気づけたいとの願いから、公募によって活動を助成する「音楽復興祈念賞」（第10回で終了）や「こどもたちのためのコンサート」を実施しています。



出会う。育む。分かちあう。 サントリーの文化活動

1986年、「世界一美しい響き」をコンセプトに誕生したサントリーホール。国内外から高い評価をいただいていた響きを大切に継承しながら、すべての人が快適に過ごせるようユニバーサルデザインを推進するなど、より多くの方々に音楽を楽しんでいただける場となることを目指してきました。芸術と人との出会いの場をつくり、ともに文化を育み、感動を分かち合いたい。創業当初から変わらない思いがあるからこそ、時代に合わせて進化していく。サントリーの文化活動は、これからも新たな挑戦を続けていきます。



